国立国語研究所学術情報リポジトリ

木曽川方言文法概説

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002442

木曽川方言文法概説

平子 達也[1]　久保薗 愛[2]　山口 響史[3]

0　はじめに

本稿は，愛知県旧葉栗郡木曽川町域（現在は同県一宮市木曽川町）で話される方言（以下，木曽川方言）について，その文法の概略を記述するものである。本稿で用いるデータは，2017年8月に行われた本プロジェクトの合同調査で得られたデータと，本稿の筆者らによる調査で得られたデータである。

さて，本稿には，合同調査や筆者らの調査にご協力いただいた地元の皆様に対する調査成果の還元と，本プロジェクトの調査・研究の中間報告という2つの側面がある。

地元の皆様にとっては，やや専門的な内容ではあるかもしれないが，ご協力いただいた調査の成果がどのような形でまとめられたかをご覧いただきたい。「今後の課題」等とされている部分も多い。それらを明らかにするためにも，今後も我々の調査・研究に引き続きご協力いただければ幸いである。

研究者・専門家の皆様には，是非とも批判的な目で読んでいただき，記述の不適切・不十分な点について，ご意見をいただきたいと思う。特に，本プロジェクトの関係者には，本プロジェクトの共通調査票を用いた調査によって，この方言の文法の何がどこまで明らかになり，また，何が明らかになっていないのかということを意識して読んでいただければと思う。その意味では，本プロジェクトの共通調査票を用いた調査に基づいて，文法概説を記述する1つの試みとして本稿を位置付けることができるかもしれない。

筆者らとしては，ひとまず文法概説という形でここまでの調査・研究の成果をまとめることで，木曽川方言の特徴について，大まかにでも把握できたという思いがある。それとともに，やはり調査・研究が不十分なところが多々あると感じている。本稿を礎として，木曽川方言のさらなる調査・研究を進めていきたい。

なお，本稿の執筆に際しては，窪薗（監修）・森他（編）(2015)，小西(2016)，下地(2018)，占部(2018)など，既存の日本・琉球諸方言の記述文法書および下地理則氏が作成したwebページ「消滅危機方言の記述文法作成支援」[4]を参考にした。

[1] ひらこ たつや：駒澤大学・講師　ttyhrk43@gmail.com
[2] くぼぞの　あい：愛知県立大学・准教授　i_kb2n@jps.aichi-pu.ac.jp
[3] やまぐち　きょうじ：愛知淑徳大学・講師　ykyoji@asu.aasa.ac.jp
[4] https://www.mshimoji.com/grammarwriting（2019年1月31日閲覧）

1　方言の概要

1.1　地理・系統

本稿で言う木曽川方言とは，愛知県旧葉栗郡木曽川町域において話される日本語の地理的変種のことである。木曽川町内に地域差が存在する可能性も否定はできないが，今回は，その詳細には立ち入らず，基本的には2017年8月に行われた本プロジェクトの合同調査と筆者らの調査で得られたデータを全て，木曽川方言のデータとして扱うこととする。

東條(1954)の分類によれば，木曽川方言を含む愛知県西部の方言（尾張・知多方言）は，同県東部の三河方言や岐阜県諸方言とともに，東海東山方言の一つに分類される。東海東山方言は，琉球諸方言を除く日本語諸方言を東部・西部・九州の3つに分類したときの，東部方言に分類されるものである（図1）。

図 1

東部方言 ┌ 北海道方言，東北方言，関東方言
　　　　└ 東海東山方言，八丈島方言
西部方言 ┌ 北陸方言，近畿方言，中国方言，
　　　　└ 雲伯方言，四国方言
九州方言 ┌ 豊日方言
　　　　└ 肥筑方言，薩隅方言

一方，東條(1927)では，九州方言を除く本州の諸方言を東部・中部・西部の3つに分類し，東海東山方言は，北陸方言とともに中部方言に分類される。木曽川方言を含む東海東山方言の方言区画上の位置付けや，系統的な位置付けは，未だはっきりとしていないと言って良い。

ただし，同じ愛知県内の方言であっても，木曽川方言を含む尾張・知多方言と，県東部の三河方言とは系統が異なることは明らかである。詳細は省くが，アクセントその他の観点からすれば，尾張・知多の諸方言は岐阜県美濃地方の諸方言と系統的に近いことは明らかである。一方，三河方言は，さらに東西の2つに分けられ，そのうち，東三河方言は静岡西部（遠州）の諸方言と系統的に近いものと考えられる（金田一 1978）。

1.2　生業・文化

2005年4月，旧木曽川町は，旧尾西市とともに一宮市と合併をした。現一宮市域は，伝統的に繊維業が盛んであり，現在でも，繊維業に関わる人の割合が高いという（一宮市HPより[5]）。

1.3　話者数・危機の度合い

伝統的な木曽川方言を話す話者の数は，必ずしも明らかではないが，以下のように推計する

[5] http://www.city.ichinomiya.aichi.jp/shisei/shinoshoukai/1002713.html（2018 年 12 月 11 日閲覧）

ことができよう。

愛知県一宮市の人口は，2018年4月現在で約38万5千人である。そのうち，旧木曽川町区の人口は約3万4千人であるが，一宮市市街地出身の筆者（平子）の感覚と，調査協力者の話から考えると，伝統的な木曽川町方言を話すのは60代後半以上の世代であると考えられる。一宮市全体で65歳以上の人口の割合は26.4%（木曽川町域のみの割合は不明）であるが，他地域からの移住者も多いことから考えると，伝統的な木曽川方言話者は，旧木曽川町区全体の人口の20%程度，つまり，6000～7000人程度かと考えられる。

話者数からすれば，危機の度合いは高くないと考えられるが，筆者の両親の世代（70代前半から後半）においても，例えば主格助詞の*=N*（タローン(*taroR=N*)「太郎が」のン(*=N*)）が使用されることは決して多くないと言う印象であり，況してや，50代以下の世代においては*=N*はほとんど使用されない。また，アスペクト接辞*-joRr-*（アルキョール(*aruk-joRr-u*)「歩いている」のョール(*-joRr-*)）や，当方言に特徴的なæ, y, œといった（標準語の二重母音に対応する）母音も，50代以下の世代ではほとんど観察されない。そのような観点から言えば，必ずしも世代間継承がなされているとは言えない状況にあり，危機の度合いは決して低くないと言える。

一方で，木曽川方言そのものではないが，尾張方言に関する記述の積み重ねは幾らかある（1.4節参照）。さらには，旧木曽川町時代に，当時の町長が各種の広報誌において「尾張弁講座」と題する記事を執筆するなど，方言に対する関心は地域全体にある程度根付いているようにも思われる。また，筆者（平子）の世代（30代前半）でも，「遅上がり」のアクセントや「相補型」の疑問文イントネーション体系（本報告書の木部論文を参照）など，尾張方言に特徴的と言える言語特徴は幾らか保存されている。再活性化は必ずしも容易ではないが，今回の合同調査と本報告書が，そのきっかけになる可能性は残されている。

1.4　主要な先行研究

木曽川方言それ自体のまとまった記述はこれまでにないが，尾張地方の諸方言については，愛知県教育委員会(1985)に旧西春日井郡師勝町大字高田寺（現北名古屋市高田寺）の方言に関する音韻論と形態論を中心としたまとまった記述がある。また，新修稲沢市史編纂会(1982)にも，尾張地域中部に位置する稲沢市方言に関する，音声・音韻と形態論を中心とした記述がある。その他に金田一(1978)など，アクセントを中心とした研究がいくつかある。また，文法記述や語彙集も，各地の市町村史等に見られるが，それらについては省略する。

2　音韻論

2．1　音素目録

本方言の母音音素は以下の表 1 に示す通り 5 つである。

表1：木曽川方言の母音音素

	前	後
狭	i	u
	e	o
広	a	

音声的には，[æ:], [œ:], [y:]という音声が現れる。これらはそれぞれ，標準語の/ai, ae/，/oi, oe/，/ui/に対応する。一方，本方言内部においては，/ai/，/oi/，/ui/が表層において[æ:], [œ:], [y:]となっていると考えるべき現象は認められるが，/ae/や/oe/が[æ:], [œ:]となっていると認めうる証拠はない（2.4 節も参照）。ここでは，仮に/ai/ → [æ:]という音韻規則を想定し，例えば「大根」[dæ:koɴ]であれば，それは/daikoN/という音素形（基底形）の音声的・表層的な現れであるとしておく。従って，ここでは/æ/, /œ/, /y/という音素を認めることはしない。「赤い」であれば，//aka-i// → /akai/ → [akæ:]のような形態音韻規則を想定することにしたい。

長母音は，母音音素に長母音音素/R/が続いたものとして解釈する。音声的長母音の音韻的解釈としては，短母音音素が 2 つ並んだものとする解釈もあり得る。そして，短母音音素が 2 つ並んだものとした方が音素の数は少なくなり，音韻論的観点からは，その方が経済的であるとも言える。しかし，ここでは，以下に示すように，動詞否定形の形式に関する記述をより簡略にするために，長母音音素 R を設定するものとする。

例えば，子音語幹動詞 *kak-*「書く」の非過去否定形には，*kak-aN* と *kak-eseN* という形式がある。同様に，母音語幹動詞 *mi-*「見る」や *de-*「出る」の場合にも，*mi-N*・*de-N* という形式の他に，*mi-RseN*, *de-RseN* という形式がある。また，不規則動詞「来る」と「する」の場合には，*ko-N* と *ko-RseN*，*se-N* と *se-RseN* とがある（*si-N* と *si-RseN* という形式もあるが，話者の感覚として「新しい」形式であるということなので，今議論の外に措く）。

この時，子音語幹動詞に接続する*-aN* に対して，*-N* を母音語幹動詞・不規則動詞に接続する異形態と認めることに大きな問題はないであろう。一方，形式的には「〜しはしない」という取り立て否定形に由来すると思われる *kak-eseN*，*mi-RseN*，*de-RseN*，*ko-RseN*，*se-RseN* の諸形式については，長母音音素を認める立場をとれば，子音語幹動詞に接続する*-eseN* に対し，*-RseN* という形式をその他の動詞に接続する異形態とすることができる。しかし，仮に長母音音素を認めない立場をとれば，*-iseN*（*mi-iseN*），*-eseN*（*kak-eseN*, *de-eseN*, *se-eseN*），*-oseN*（*ko-oseN*）という 3 つの異形態を認めることになる。異形態の数としては，長母音音素を認めるか否かで 1 つしか異ならないが，長母音音素を認めない場合，*-aN* と*-N* に認められた「子音語幹」対「その他」という対立が見えにくくなる。なお考慮すべきことはあるが，本稿ではひとまず，この点を重視して，長母音を短母音が 2 つ並んだものとは解釈せず，各母音音素に長母音音素 R が

続いたものと解釈をしておく[6]。

関連して，表層に現れる母音連続は[ai], [oi], [ui]は，基本的には，その連続する母音の間に形態素境界があり，また，音節境界があるものと解釈する[7]。この時，境界の前後にある形態素のうち，少なくともどちらか一方の形態素が自由形態素である（ex.「まな板」[mana.ita], *[manæ:ta] ;「戸板」[to.ita], *[tœ:ta]）。後に述べるアクセントの観点からも，これらの母音の間には音節境界（‘ . ’で表記）が存在するものと解釈される。

次に，子音音素の一覧を以下に示す。/g/は，原則として，語中で鼻濁[ŋ]，語頭では破裂音[g]で現れる。

表2：木曽川方言の子音音素

		両唇音	歯(茎)音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
破裂音	無声	p	t		k	
	有声	b	d		g[ɡ~ŋ]	
破擦音	無声		c[ts~tɕ]			
	有声		z[dz~dʑ]			
摩擦音			s[s~ɕ]			h
共鳴音	鼻音	m	n			N
	接近音	w		j		
	はじき音		r[ɾ]			

以下に，この方言のモーラ一覧を，本稿で用いる仮名表記とともに示す。

表 3-1：短母音を含むモーラ

音素表記	/a/	/i/	/u/	/e/	/o/
音声	a	i	ɯ	e	o
仮名	ア	イ	ウ	エ	オ
音素表記	/pa/	/pi/	/pu/	/pe/	/po/
音声	pa	pi	pɯ	pe	po
仮名	パ	ピ	プ	ペ	ポ
音素表記	/pja/		/pju/		/pjo/
音声	pʲa		pʲɯ		pʲo
仮名	ピャ		ピュ		ピョ
音素表記	/ba/	/bi/	/bu/	/be/	/bo/
音声	ba	bi	bɯ	be	bo
仮名	バ	ビ	ブ	ベ	ボ

[6] なお，*-seN* のみを取り立て否定由来の否定接辞として取り出し，その前の部分 *kak-e-*, *miR-*などを否定拡張語幹とする立場もあり得るが，今，その立場を積極的に支持する根拠もない（愛知県教育委員会 1985: 19-20 も参照）。本稿では，暫定的に上述のような分析を取っておく。

[7] ただし，標準語の影響で現れていると思われる二重母音・母音連続もある。詳細は未調査。

音素表記	/bja/		/bju/		/bjo/
音声	bʲa		bʲɯ		bʲo
仮名	ビャ		ビュ		ビョ
音素表記	/ma/	/mi/	/mu/	/me/	/mo/
音声	ma	mi	mɯ	me	mo
仮名	マ	ミ	ム	メ	モ
音素表記	/mja/		/mju/		/mjo/
音声	mʲa		mʲɯ		mʲo
仮名	ミャ		ミュ		ミョ
音素表記	/ta/			/te/	/to/
音声	ta			te	to
仮名	タ			テ	ト
音素表記	/da/			/de/	/do/
音声	da			de	do
仮名	ダ			デ	ド
音素表記	/sa/	/si/	/su/	/se/	/so/
音声	sa	ɕi	sɯ	se	so
仮名	サ	シ	ス	セ	ソ
音素表記	/sja/		/sju/	/sje/	/sjo/
音声	ɕa		ɕɯ	ɕe	ɕo
仮名	シャ		シュ	シェ	ショ
音素表記	/ca/	/ci/	/cu/		/co/
音声	tsa	tɕi	tsɯ		tso
仮名	ツァ	チ	ツ		ツォ
音素表記	/cja/		/cju/	/cje/	/cjo/
音声	tɕa		tɕɯ	tɕe	tɕo
仮名	チャ		チュ	チェ	チョ
音素表記	/za/	/zi/	/zu/	/ze/	/zo/
音声	dza (~ za)	dʑi (~ ʑi)	dzɯ (~ zɯ)	dze (~ ze)	dzo (~ zo)
仮名	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ
音素表記	/zja/		/zju/	/zje/	/zjo/
音声	dʑa (~ ʑa)		dʑɯ (~ ʑɯ)	dʑe (~ ʑe)	dʑo (~ ʑo)
仮名	ジャ		ジュ	ジェ	ジョ
音素表記	/na/	/ni/	/nu/	/ne/	/no/
音声	na	ni	nɯ	ne	no
仮名	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
音素表記	/nja/		/nju/		/njo/
音声	nʲa		nʲɯ		nʲo
仮名	ニャ		ニュ		ニョ

音素表記	/ka/	/ki/	/ku/	/ke/	/ko/
音声	ka	ki	kɯ	ke	ko
仮名	カ	キ	ク	ケ	コ
音素表記	/kja/		/kju/		/kjo/
音声	kʲa		kʲɯ		kʲo
仮名	キャ		キュ		キョ
音素表記	/ga/	/gi/	/gu/	/ge/	/go/
音声	ga ~ ŋa	gi ~ ŋi	gɯ ~ŋɯ	ge ~ ŋe	go ~ ŋo
仮名	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
音素表記	/gja/		/gju/		/gjo/
音声	gʲa ~ ŋʲa		gʲɯ ~ ŋʲɯ		gʲo ~ ŋʲo
仮名	ギャ		ギュ		ギョ
音素表記	/ha/	/hi/	/hu/	/he/	/ho/
音声	ha	çi	ɸɯ	he	ho
仮名	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
音素表記	/hja/		/hju/		/hjo/
音声	ça		çɯ		ço
仮名	ヒャ		ヒュ		ヒョ
音素表記	/hwa/				/hwo/
音声	ɸa				ɸo
仮名	ファ				フォ
音素表記	/ra/	/ri/	/ru/	/re/	/ro/
音声	ɾa	ɾi	ɾɯ	ɾe	ɾo
仮名	ラ	リ	ル	レ	ロ
音素表記	/rja/		/rju/		/rjo/
音声	ɾʲa		ɾʲɯ		ɾʲo
仮名	リャ		リュ		リョ
音素表記	/ja/		/ju/		/jo/
音声	ja		jɯ		jo
仮名	ヤ		ユ		ヨ
音素表記	/wa/				
音声	wa				
仮名	ワ				

表 3-2：促音・撥音・長音(C は任意の子音，V は任意の母音)

音素表記	/Q/	/N/	/VR/		
音声	-CC-	n ~ m ~ ŋ ~ ɴ	(C)a: など		
仮名	ッ	ン	アーなど		

表 3-3：二重母音を含む音節(2 モーラ)

音素表記	/ai/		/ui/		/oi/
音声	(C)æ: ~ (C)ɛ:		(C)y: ~ (C)yi		(C)œ: (~ we:)
仮名	アェー, カェーなど		ウィー，クィーなど		オェー, コェーなど

なお，以下の例文においては，1 行目に音声表記としての仮名表記，2 行目に形態素分析を施した音素表記，3 行目に各形態素の意味・機能，4 行目に標準語訳，の順で表記をする。

２．２　音節構造とモーラ

木曽川方言において認められる音節構造は，C を子音，V を母音，S を半母音とすれば，$(C_1)(S)V(C_2)$と示すことが出来る。このとき，V には長母音も含まれる。なお，語頭の子音連続 CS-は第 2 子音が/j/の，いわゆる拗音音節の場合に限られる。なお，CjV-のときの C の位置に/w/と/j/は立たない。また，C_2 の位置に立ちうるのは，/N/（撥音）と/Q/（促音）のみで，それらはモーラとしては 1 拍を成す。ただし，語末音節の場合に C_2 の位置に現れるのは/N/のみである。単純語に於いては，CV 構造が最も多いと思われるが，定量的な検査には至っていない。

この方言では，他動詞の直接目的語となる名詞は対格=*o* を伴うこともあるが，基本的に無助詞で現れる。ただし，1 拍名詞は末尾の母音が長く発音される形で現れる（7.2.3 節）。これは，諸方言で見られる「音韻的な語は 2 拍以上なければならない」という最小語制約の反映とも思われる。しかし，7.2.3 節の(36b)にあるように，筆者らの調査では，この対格における語末母音の長呼は，1 拍名詞以外でも観察されている。本稿では，ひとまず，この方言に最小語制約があるか否かについては議論を保留し，今後の研究課題としたい。

２．３　アクセントとイントネーション

木曽川方言のアクセント体系は，東京方言と同じく，下げ核（上野 1977）の有無と位置が弁別的な多型アクセント体系である。n拍のアクセント単位に，可能なアクセント型のパターンの数(P_n)は，$P_n=n+1$と定式化することができる。一方，類[8]の統合パターン（類別体系）からすると，木曽川方言のアクセントは内輪式アクセントに分類されるもので，中輪式アクセントの西三河方言や東京方言，外輪式アクセントの東三河方言と対立を成す。

今，各類の語がどのようなアクセント型で現れるかを，中輪式（東京方言），外輪式（東三河の新城市方言，平子 2017）と比較する形で，表4〜6にまとめる。表中，[はピッチの上昇位置を，] はピッチの下降位置示す。理解の便のため，挙例は仮名書き（一部漢字）とする。

[8] 文献資料に反映されたものも含めた日本語本土諸方言アクセントの対応にもとづき，日本本土諸方言アクセントの祖体系に再建されるアクセント型によって区別されるグループのことを「類（アクセント語類）」と呼ぶ。各類は 2 拍 1 類・2 拍 2 類など番号で呼ばれる。そして，ここに言う類別体系とは，類の統合の在り方のことを言う。金田一(1974)を参照。

表4：1拍名詞のアクセント

	1類	2類	3類
木曽川	蚊[ガ	[日]ガ	[木]ガ
東京	蚊[ガ	日[ガ	[木]ガ
新城	蚊[ガ	日[ガ	[木]ガ

表5：2拍名詞のアクセント

	1類	2類	3類	4類	5類
木曽川	カゼ[ガ	ウ[タ]ガ	ア[シ]ガ	[フ]ネガ	[サ]ルガ
東京	カ[ゼガ	ウ[タ]ガ	ア[シ]ガ	[フ]ネガ	[サ]ルガ
新城	カ[ゼガ	ウ[タガ	ア[シ]ガ	[フ]ネガ	[サ]ルガ

表6：3拍名詞のアクセント

	1類	2類	4類	5類	6類	7a類	7b類
木曽川	サカ[ナガ	アズ[キ]ガ	アタ[マ]ガ	[イ]ノチガ	ウサ[ギガ	[カ]ブトガ	クス[リガ
東京	サ[カナガ	ア[ズキ]ガ	ア[タマ]ガ	[イ]ノチガ	ウ[サギガ	[カ]ブトガ	ク[スリガ
新城	サ[カナガ	ア[ズキガ	ア[タ]マガ	[イ]ノチガ	ウ[サギガ	[カ]ブトガ	ク[スリガ

この方言の句音調は，東京方言と異なり，原則，句頭2拍目の後でピッチが上昇する形で実現する。一般に「遅あがり」として知られる現象である。聴覚印象的には，句頭から句頭3拍目にかけて，徐々にピッチが上昇していくようにも感じられる。なお，句頭2拍目に，撥音，長音がある場合は，句頭から高いピッチで実現する点は，東京方言と変わらない。

また，例えば「まな板」がmana[itaであり，ma[naitaではないことは，当該の語中に形態素境界をまたいだ形で含まれるaiという母音連続が，同一音節内に含まれないことを示唆する。（第1音節が軽音節で）第2音節が長母音や促音・撥音を含む重音節である場合に，句頭の上昇が句頭1拍目の後に見られることと比較されたい（例：wa[ɕinta]:「私たち」，o[mæ:saN「貴方様」）。

２.４　主な形態音韻規則

ここでは，主な形態音韻規則として，連濁と音便現象，母音融合について見る。

２.４.１　連濁

木曽川方言においては，多くの日本語諸方言と同様に複合語を形成する際に連濁現象が見られる。大まかには，木曽川方言における連濁は，複合語後部要素の初頭子音が無声阻害音である場合に，対応する有声阻害音に交替するものである。つまり，/k/は/g/，/t/は/d/，/s/・/c/は/z/に交替する。ただし，/h/は/b/と交替する。以下に，一部例をあげる。

(1) a. /k/：kame「甕」　→　g：mizu+game「水甕」（水＋甕）
　　b. /c/：ci「血」　→　z：hana+zi「鼻血」（鼻＋血）
　　c. /h/：hoki「箒」　→　b：niwa+boki「庭箒」（庭＋箒）

詳細な調査には至っていないが，連濁現象は後部要素が外来語である場合には起こらない。/p/が語頭に現れるのは，専ら外来語の場合であり，それ故/p/が連濁によって/b/と交替することはない。

２.４.２　音便

ここにいう「音便」とは，子音語幹動詞（4.1 節参照）に過去接辞//-ta//や中止形副動詞接辞//-te//などが続く場合に，語幹末子音に生じる音素交替現象のことである。以下のように，まとめられる。

表 7：子音語幹動詞における音便現象

語幹末子音	語例	活用形例（過去形）	作り方
k	書く　kak-u	/kai-ta/	/k/を/i/にする。但し，「行く」ik-u は例外的に/k/を Q（促音）にする。
g	嗅ぐ　kag-u	/kai-da/	/g/を/i/にする。接辞初頭の/t/は/d/となる。
s	出す　das-u	/dai-ta/	/s/を/i/にする。
c	立つ　tac-u	/taQ-ta/	/c/を Q（促音）にする。
n	死ぬ　sin-u	/sin-da/	/n/を N（撥音）にする。接辞初頭の/t/は/d/となる。
b	飛ぶ　tob-u	/toN-da/	/b/を N（撥音）にする。接辞初頭の/t/は/d/となる。
m	飲む　nom-u	/non-da/	/m/を N（撥音）にする。接辞初頭の/t/は/d/となる。
r	切る　kir-u	/kiQ-ta/	/r/を Q（促音）にする。
w/ø	買う　ka(w)-u	/kaQ-ta/	/w/を Q（促音）にする。

２．４．３　母音融合

既に述べたように，/ai/, /oi/, /ui/は，音声的には[æ:], [œ:], [y:]という音声で現れる。これらはそれぞれ，標準語の/ai, ae/，/oi, oe/，/ui/に対応する。

本方言内部において，/ai/，/oi/，/ui/が表層で[æ:], [œ:], [y:]となっていると考えるべきと考えるのは，「赤い」という形容詞の非過去形が，[akæ:]という形で現れることにある。種々の証拠から，「赤い」という形容詞の語幹は//aka//であり，非過去終止形の接辞は//-i//と考えられる。それ故，//aka-i// → /akai/ →[akæ:]のような形態音韻規則を想定することにしたい。例えば「大根」[dæ:koɴ]であれば，それは/daikoN/という音素形（基底形）の音声的・表層的な現れだと考える。

一方で，/ae/や/oe/が[æ:], [œ:]となっていると認めうる証拠はない。よって，ここでは表層において[æ:], [œ:], [y:]という音声で現れるものは全て基底に於いて，/ai/，/oi/，/ui/という二重母音であるものと考えておく。なお，ここでは *jo*-「良い」の非過去形//jo-i//が，[e:]と実現されるのも，/oi/ → [œ:]の音韻規則に準ずるものと考える。

また，[hajo:]（//haja-u//「早く」）から，形容詞の副詞形を作る接辞//-u//について，//a-u// → /o(R)/ [o(:)] という形態音韻規則を想定しておくことにする。加えて，[jasaɕɯ:]（//jasasi-u//「優しく」）や[jɯ:]（//i-u//「言う」）から，//i-u// → /ju(R)/ [jɯ(:)] という音声化規則を想定する。

3　名詞の構造

3.1　名詞の内部構造

名詞語幹に続く接辞としては，これまでのところ，複数を表す*-(N)taR / -raR / -taci* と，曖昧化を表す*-naNka* が認められ，この順で続く。*-(N)taR / -raR* の使い分けの条件や，どのような名詞にも続くことができるのか等は不明である。ただ，*-(N)taR / -raR* は，動物や無生物を複数化するのに用いにくいという話者はいた。

(2)　a. ワシンター　b. ダレンター　c. ダレラー

wasi-NtaR	dare-NtaR	dare-raR
1-PL	誰-PL	誰-PL
「私たち」	「誰たち」	「誰たち」

3.2　代名詞の構造と体系

人称代名詞を，発話場面における話し手（1 人称），聞き手（2 人称），それ以外（3 人称）を指示するのに用いられる専用の形式であるとすれば，木曽川方言には，1 人称代名詞と 2 人称代名詞は存在するが，3 人称代名詞は存在しないと言える。3 人称の指示対象は，後に述べる指示代名詞や固有名詞などによって指示され，3 人称を指示するための義務的な形式はない。

今回の調査では，1 人称代名詞に *wasi，ore，watasi，boku* の 4 形式が確認されたが，伝統的な方言形として *wasi* が最もよく用いられるようであり，*wasjaR* という提題形式も見られる。

2 人称代名詞としては，*omai* [omæ:]，*aNta，omasaN* がある。*omai* を目上の者に対して用いることはできず，*omasaN* は聞き手に対して，やや敬意を示すような言い方である。この 3 つの中では，*aNta* の使用範囲が最も広いようで，聞き手の性別や敬意の有無に関わらず，使用可能である。

なお，再帰代名詞（「自分」）は zibuN で表される。

(3)　タローワ　{オトトニ / オトトェー}　ジブンノ　イエオ　ヤッタ

taroR=wa	{ototo=ni / ototo=i}	zibuN=no	ie=o	jaQ-ta
太郎=TOP	{弟=DAT / 弟=LOC}	RFL=GEN	家=ACC	やる-PST

「太郎は弟に自分の家をやった」

指示代名詞・疑問代名詞については，6 節で述べる。

3.3　数詞

数詞は，格助詞（7.2 節）を伴い，項となることができたり，属格助詞 *=no* を伴って名詞を修飾することできたりするなど，一般の名詞と同様の振る舞いをする。もちろん，そのままコピュラ*=ja, =da* をとることもあると考えられるが，具体例は得られていない。

(4) a. アノ　カシ　{アンタラ / アンタタチ}　フタリガ　タベタノ
ano　kasi　{ aNta-ra / aNta-taci }　hutari=ga　tabe-ta=no
あの　菓子　{ 2-PL / 2-PL }　二人=NOM　食べる-PST=SFP
「あの菓子は，あなたたち二人が食べたのですか？」

b. フタリノ　オトコガ　ナグリアッタ
hutari=no　otoko=ga　nagur-i+aQ-ta
二人=GEN　男=NOM　殴る-INF+合う-PST
「二人の男が殴り合った」

上記のような名詞としての用法以外に，副詞的に用いられる用法もある。この時，格助詞を伴わないのが普通である。

(5) オトコガ　ヒトリ アルィートル
otoko=ga　hitori　arui-tor-u
男=NOM　一人　歩く-PF-NPST
「男が一人歩いている」

数詞は，形態論的には数詞語幹と類別接辞をとる構成となっている。以下に，代表的な数詞である「〜人」（人間），「〜つ」（一般的に物質の個数を数える場合に用いられる）の 1 から 9 までの表現をあげる。

表 8：数詞の表現の例

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
人	*hitori*	*hutaRri*	*saN-nin*	*joQtari* *jo-niN*	*go-niN*	*roku-niN*	*hici-niN*	*haci-niN*	*ku-niN*
一般	*hito-cu*	*hutaR-cu*	*miQ-cu*	*joQ-cu*	*icu-cu*	*muQ-cu*	*nana-cu*	*jaQ-cu*	*kokono-cu*

表 8 から明らかなように，「〜人」の場合には，「1 人」「2 人」「4 人」の場合に，*-ri* という特別な形式が見られる一方，他は漢語由来の形式（*saN, go, roku*・・・など）に*-niN* を付した形式が用いられる（10 以上の場合も同様）。ただし，「4 人」の場合にはその両方が用いられる。漢語由来の形式が用いられるのは，他の類別接辞（例えば*-hiki*「〜匹」（動物一般））が用いられる場合でも同じであると考えられるが，データは得られていない。

４．動詞の構造

４．１　基本構造

動詞は，大きく文終止の形としての定動詞と，副詞節を形成する副動詞とに分けられる。定動詞は，テンス（時制）・ムードのいずれかで屈折（活用）し，また，多くの場合，肯定・否定によっても屈折する。なお，定動詞形は，連体修飾節を形成するのに用いられたり，その後に種々の形式名詞を伴うことで準体節を形成するのにも用いられたりする。また，接続助詞を伴い，副詞節を形成する場合もある（8.1.3 節と 10.1 節）。副動詞は時制で屈折せず，基本的に文終止の機能は持たない（ただし，10.4 節参照）。

４．１．１　定動詞（文末終止形）の屈折

後に述べるように，木曽川方言の動詞は，規則的な活用をする動詞として，子音語幹動詞・母音語幹動詞がある。この他に *ku-*「来る」と *su-*「する」という不規則動詞がある。また，派生接辞によって派生された語幹は，子音語幹・母音語幹のどちらかに分類される。なお，コピュラ動詞(=*ja*)については，4.2 節で詳しく述べる。

表 9：定動詞の屈折

ムード	テンス	肯否	子音語幹 *kak-* 「書く」	母音語幹		不規則	
				mi- 「見る」	*de-* 「出る」	*ku-, ko-, ki-* 「来る」	*su-, se-, si-* 「する」
中立	非過去	肯定	*kak-u*	*mi-ru*	*de-ru*	*ku-ru*	*su-ru*
		否定	*kak-aN* *kak-eseN ~* *kak-eheN*	*mi-N* *mi-RseN ~* *mi-RheN*	*de-N* *de-RseN ~* *de-RheN*	*ko-N* *ko-RseN ~* *ko-RheN*	*se-N ~ si-N* *se-RseN ~* *se-RheN ~* *si-RseN ~* *si-RheN*
	過去	肯定	*kai-ta*	*mi-ta*	*de-ta*	*ki-ta*	*si-ta*
		否定	*kak-ananda* *kak-esenaNda* *kak-ehenaNda*	*mi-nanda* *mi-RsenaNda* *mi-RhenaNda*	*de-nanda* *de-RsenaNda* *de-RhenaNda*	*ko-nanda* *ko-RsenaNda* *ko-RhenaNda*	*se-nanda* *si-nanda* *se-RhenaNda* *si-RhenaNda*
意志		肯定	*kak-o(R)*	*mi-jo(R)*	*de-jo(R)*	*ko-jo(R)*	*si-jo(R)*
		否定	*kak-a-mai*	*mi-mai*	*de-mai*	*ko-mai*	*si-mai*
命令			*kak-e* *kak-jaR*	*mi-jo* *mi-jaR*	*de-jo* *de-jaR*	*ko-i* *(ir-jaR)*	*seR* *si-jaR*

動詞語根に続いて，動詞語幹を派生する接辞には，以下のようなものがある。語幹のクラス（子音語幹動詞，母音語幹動詞，不規則動詞）によって，接辞は種々の異形態をとる。

表 10：派生接辞とその異形態

	子音語幹動詞	母音語幹動詞	来る	する
使役	*-ase-*	*-sase-*	*ko-sase-*	*s-ase-*
受身	*-are-*	*-rare-*	*ko-rare-*	*s-are-*
自発	*-arakas-*	*-rakas-*	*(ko-rakas-)*	*si-rakas-*
非完成（imperfective）	*-joRr-*	*-joRr-*	*ki-joRr-*	*si-joRr-*
完了（perfect）	*-tor- ~ -dor-* *-ter- ~ -der-*	*-tor-* *-ter-*	*ki-tor-* *ki-ter-*	*si-tor-* *si-ter-*
尊敬 1	*-jaRs-*	*-jaRs-*	*ko-jaRs-* *ki-jaRs-*	*si-jaRs-*
尊敬 2	*-asse-*	*-jasse-*	*ko-jasse-*	*si-jasse-*
丁寧	*-imas-*	*-mas-*	*-mas-*	*-mas-*

語幹の内部構造は，以下のように示すことができる。

(6) 語根-使役-受身-自発-アスペクト-敬意（-屈折接辞）

完了相のアスペクトを標示する*-ter- ~ -der-*は，標準語形かとも思われるが，以下のように尊敬接辞*-jaRs-*との共起において，*-tor- ~ -dor-*と差が見られる。

(7) カノジョワ　キモノー　{キテリャース　/ ??キトリャース}
kanozjo=wa　kimono=o　{ki-ter-jaRs-u　/ ??ki-tor-jaRs-u}
彼女=TOP　着物=ACC　{着る-PF-HON-NPST　/ ??着る-PF-HON-NPST}
「彼女は着物を着ていらっしゃる」

４．１．２　副動詞の屈折

副動詞の屈折は，以下の表 11 のようになっている。不定形も合わせてまとめる。

表 11：副動詞の屈折

		子音語幹動詞	母音語幹動詞	来る	する
不定形		*-i*	*-φ*	*ki*	*si*
中止	肯定	*-te ~ -de*	*-te*	*ki-te*	*si-te*
	否定 1	*-asuto*	*-suto*	*ko-suto*	*se-suto*
	否定 2	*-azuni*	*-zuni*	*ko-zuni*	*se-zuni*
条件 1	肯定	*-ja*	*-ja*	*ko-ja*	*si-ja ~ se-ja*
	否定	*-ana*	*-na*	*ko-na*	*si-na* *se-na*
条件 2	肯定	*-tara ~ dara*	*-tara*	*ki-tara*	*si-tara*
	否定	*-anaNdara*	*-naNdara*	*ko-naNdara*	*si-naNdara*
同時		*-inagra*	*-nagara*	*ki-nagara*	*si-nagara*

なお，既に触れたように，副動詞の屈折以外にも，従属節（副詞節）を形成する手段として，定動詞形に，各種の接続助詞を続ける方法がある（8.1.3 節と 10.1 節を参照）。

4.2　コピュラ

コピュラ動詞*=ja/=da*「〜だ」は，他の動詞とは定動詞・副動詞ともに屈折が異なる。ムード・テンスで屈折するが，命令形はない。名詞が述語位置に立つ場合には，コピュラを伴う。その屈折を，表 12 にまとめる。

表 12：コピュラの屈折

	ムード	テンス	***=ja***	***=da***
定動詞	中立	非過去	*=ja*	*=da*
		過去	*=jaQ-ta*	*=daQ-ta*
	推量		*=ja-roR*	*=da-roR*
副動詞	中止形		*=de*	*=de*
	副詞形		*=ni* ~ *=N*	*=ni* ~ *=N*
	条件 1		*=jaQ-tara*	*=daQ-tara*
	条件 2		*=nara*	*=nara*

コピュラの否定は，*=(z)ja na-*「〜ではない」の形になる。なお，*na-*の屈折は活用型形容詞と基本的には同じである（ただし 5.1 節参照）。また，*=(z)ja* と *na-*とは，アクセントから見て，音韻上 2 句に分かれる。そのため，ここでは *na-*を，コピュラ否定形を作る派生接辞とはせず，独立の語（幹）と見る。

５　形容詞の構造

５.１　活用型形容詞

活用型形容詞の屈折は以下のようにまとめられる。

表 13：形容詞の屈折

	***aka*「赤い」**	***kanasi*「悲しい」**
非過去・肯定	*aka-i*	*kanasi-i*
中止形「〜て」	*aka-te*	*kanasi-te*
条件 1「〜ければ」	*aka-ke(r)ja(R)*	*kanasi-ke(r)ja(R)*
副詞形「〜く」	*aka-u*	*kanasi-u*

形容詞の屈折として認められるのは上記のみで，形容詞の否定は *aka#na-*のように形容詞語幹に，否定形容詞 *na-*を続ける。この時，形容詞語幹と否定形容詞とは，アクセントなどの観点から見て，それぞれ音韻的に独立していると考えられる。また，*aka-kar-* のように形容詞語根に形容詞語幹拡張接辞（形容詞動詞化接辞）の*-kar-*を伴うことで，過去(*aka-kaQ-ta*)や仮定(*aka-kaQ-tara*)の形を作ることができる。*-kar-*の屈折は，存在動詞 *ar-*「ある」などの r 語幹動詞と同じである（表 14)。

表 14：形容詞否定形と-kar-形容詞の屈折

ムード	テンス	肯否	***aka*「赤い」**	***kanasi*「悲しい」**
中立	過去	肯定	*aka-kaQ-ta*	*kanasi-kaQ-ta*
		否定	*aka#na-kaQ-ta*	*kanasi#na-kaQ-ta*
推量		肯定	*aka-kar-oR*	*kanasi-kar-oR*
		否定	*aka#na-kar-oR*	*kanasi#na-kar-oR*
条件 2		肯定	*aka-kaQ-tara*	*kanasi-kaQ-tara*
		否定	*aka#na-kaQ-tara*	*kanasi#na-kaQ-tara*

なお，否定形容詞 *na* は，基本的に一般の形容詞と同じ活用をするが，条件形が特殊である。つまり，条件 1 が**na-keja* ではなく，*na-kena* となること，条件 2 が**na#na-kaQ-tara* ではなく，*na-kaQ-tara* となる。

５．２　非活用型形容詞

sizuka「静か」など状態を表す名詞（形容名詞）は，コピュラ*=ja/=da* を付すことによって，述語位置に立つことができる。そのコピュラの屈折は，基本的に一般のコピュラと同じであるが，名詞修飾の際には*=na* という形をとる。

５.３　形容詞の用法

活用型形容詞と非活用型形容詞の用法について，具体例を挙げることで説明にかえる。

５．３．１　名詞修飾

(8) アシガ　ハヤェー　ヒトガ　ウラヤマシー
asi=ga　haja-i　hito=ga　urajamasi-i
足=NOM　速い-NPST　人=NOM　羨ましい-NPST
「足が速い人が羨ましい」

(9) シズカナ　トコロニ　スミタイ
sizuka=na　tokoro=ni　sum-ita-i
静か=COP　ところ=LOC　住む-DES-NPST
「静なところに住みたい」

５．３．２　述語

(10) タローワ　アシガ　ハヤェー
taroR=wa　asi=ga　haja-i
太郎=TOP　足=NOM　速い-NPST
「太郎は足が速い」

(11) コノ　ヘンワ　トッテモ　シズカヤネ
kono　heN=wa　toQtemo　sizuka=ja=ne
この　辺=TOP　とても　静か=COP=SFP
「この辺りはとても静かだね」

５．３．３　否定

(12) ジローワ　アシガ　ハヤナェー
ziroR=wa　asi=ga　haja#na-i
次郎=TOP　足=NOM　速い#NEG-NPST
「次郎は足が速くない」

(13) イマ　スンドル　トコワ　アンマリ　シズカヤナェー
ima　suN-dor-u　toko=wa　aNmari　sizuka=ja#na-i
今　住む-PF-NPST　所=TOP　あんまり　静か=COP#NEG-NPST
「今住んでいるところはあまり静かではない」

５．３．４　軽動詞 *nar-*との組み合わせ

(14) レンシューシヤー　アシモ　ハヤ　ナル
reNsjuR+si-jaR　asi=mo　haja　nar-u
練習+する-CND　足=ADT　早い　なる-NPST
「練習すれば足も速くなる」

(15) センセーガ　チューイシヤー　シズカン　ナル
senseR=ga　cjuRi+si=jaR　sizuka=N　nar-u
先生=NOM　注意+する-CND　静か=COP　なる-NPST
「先生が注意すれば静かになる」

なお，筆者の調査によれば，活用型形容詞の場合，軽動詞 *nar-*にそれが直接続く場合には，

形容詞語幹+*nar-*の形になるが（14），形容詞と軽動詞 *nar-*の間にとりたて助詞（=*mo*）が挿入されると，*aka-u=mo nar-u*（アコーモナル）「赤くもなる」や *kanasi-u=mo nar-u*（カナシューモナル）「悲しくもなる」のように，副詞形 *aka-u*（アコー）や *kanasi-u*（カナシュー）となる。

５．３．５　連用修飾

(16) モット　ハヨ　　ハシリャー
moQto　haja-u　　hasir-jaR
もっと　速い-INF　走る-IMP
「もっと速く走りなさい」

(17) シズカニ　ハナス
sizuka=ni　hanas-u
静か=COP　話す-NPST
「静かに話す」

５．３．６　副詞節

(18) モット　アシガ　　ハヤケリャ　アイツニ　　オイツケルニ
moQto　asi=ga　　haja-kerja　aicu=ni　　oicuk-ere-ru=ni
もっと　足=NOM　　速い-CND　あいつ=LOC　追いつく-POT-NPST=CNC
「もっと足が速ければ，あいつに追いつけるのに」

(19) タローワ　　アシガ　　ハヤェーデ　　オイツケヘンワナモ
taroR=wa　　asi=ga　　haja-i=de　　oicuk-eheN=wa=namo
太郎=TOP　　足=NOM　　速い=NPST=CSL　　追いつく-NEG.NPST=SFP=SFP
「太郎は足が速いので，追いつけない」

(20) アノ　　センシュワ　アシガ　　ハヤェーシ　　シュビモ　　ウマェー
ano　　seNsju=wa　asi=ga　　haja-i=si　　sjubi=mo　　uma-i
あの　　選手=TOP　　足=NOM　　速い-NPST=CNJ　　守備=ADT　　上手い=NPST
「あの選手は足が速いし，守備も上手い」

(21) モ　　スコシ　シズカヤッタラ　ユー　　コト　ナイノニネ
mo　　sukosi　sizuka=jaQ-tara　i-u　　koto　na-i=no=ni=ne
もう　少し　　静か=COP-CND　　言う-NPST　　コト　無い-NPST=NLZ=CNC=SFP
「もう少し静かなら言うことないのに」

(22) コノ　ヘンワ　シズカヤデ　　スゴシヤスイヤロナー
kono　heN=wa　sizuka=ja=de　　sugos-i+jasu-i=ja-ro=na
この　辺=TOP　静か=COP=CSL　　過ごす-INF+易い-NPST=COP-LCTN=SFP
「この辺は静かなので過ごしやすいだろう」

(23) コノ　ヘンワ　シズカヤシ　　ケシキモ　エーデ　　サイコーヤ
kono　heN=wa　sizuka=ja=si　　kesiki=mo　jo-i=de　　saikoR=ja
この　辺=TOP　静か=COP=CNJ　　景色=ADT　良い-NPST=CSL　　最高=COP
「この辺は静かで，景色も良くて最高だ」

６．指示語と疑問語

指示語・疑問語は，以下の表 15 に示す通り，幾つかの品詞にまたがって分布する。

表 15：指示語・疑問詞の体系

	近称	中称	遠称	疑問
代名詞	*ko-re*	*so-re*	*a-re*	*do-re*
代名詞（有生物）	*koicu*	*soicu*	*aicu*	*doicu*
場所名詞	*koko*	*soko*	*asoko*	*doko*
方向名詞	*koQci*	*soQci*	*aQci*	*doQci*
副詞	*koR*	*soR*	*aR*	*doR*
連体詞 1（様態）	*koNna*	*soNna*	*aNna*	*doNna*
連体詞 2	*ko-no*	*so-no*	*a-no*	*do-no*

指示語の用法は，コ・ソ・アの三項対立であることも含め，標準語と変わらない。指示対象が発話場の事物であるときは（現場指示用法），話し手側の事物には ko 系，聞き手側の事物には so 系，どちら側とも見なされない時は a 系が用いられる。

(24) アレワ　　ツキダガェー
　are=wa　　cuki=da=gai
　あれ=TOP　　月=COP=SFP
　（空に見える月を指差して）「あれは月だよ」
(25) コレ　ミヤー
　kore　mi-jaR
　これ　見る-IMP
　（自分の手元にあるものを指差して）「これを見ろ」
(26) ソレオ　　ミセヤー
　sore=o　　mise-jaR
　それ=ACC　　見せる-IMP
　（相手の手元にあるものを指差して）「それを見せろ」

なお，文脈指示用法においては，主に so 系が用いられるようだが，自然談話資料を用いた分析など，詳しい調査・分析には至っていない。

(27) ソレ　　ヨカッタナモ
　sore　　jo-kaQ-ta=namo
　それ　　良い-VLZ-PST=SFP
（相手の孫が結婚したと聞いて）「それは良かったね」

疑問語には，表15に示したもの以外に，これまでの調査で，*dare*「誰」，*nani*「何」，*ikucu*「幾

つ」，*naNde*「何故」，*icu*「何時」が確認されている。疑問語の用法について，その具体例を挙げることで，説明に代える。なお，疑問文のイントネーションなどについては，本報告書所収の木部論文を参考のこと。

(28) ダレガ　　オルノ
dare=ga　　or-u=no
誰=NOM　　いる-NPST=SFP
「誰がいるの？」

(29) ヤマノ　　ムコーニワ　　ナニガ　　アルノ
jama=no　　mukoR=ni=wa　　nani=ga　　ar-u=no
山=GEN　　向こう=LOC=TOP　　何=NOM　　ある-NPST=SFP
「山の向こうには何があるの？」

(30) ソノ　ウチワ　　ヘヤハ　　イクツ　アルノ
sono　uci=wa　　heja=wa　　ikucu　　ar-u=no
その　家=TOP　　部屋=TOP　幾つ　　ある-NPST=SFP
「その家，部屋は幾つあるの？」

(31) ナンデ　ソノ　ウチ　カヤータ(ノ)
naNde　sono　uci　　ka-jaR-ta(=no)
何故　　その　家　　買う-HON-PST(=SFP)
「何故，その家を買ったの？」

(32) ソノ　ウチワ　イツ　カヤータノ
sono　uci=wa　icu　　ka-jaR-ta=no
その　家=TOP　いつ　買う-HON-PST=SFP
「その家はいつ買ったの？」

なお，疑問語に疑問助詞=*ka*を後続させることによって，不定語が作られる（「誰」に対する「誰か」など）。

７．名詞句の構造

７．１　基本構造

名詞句では，修飾部が主要部に先行する。修飾部には，名詞句・形容詞・連体詞・連体節が立つ。主要部には名詞が立つ。また，格助詞・とりたて助詞は名詞句の主要部に後続する。例は，ここでは略す。

７．２　格の種類と機能

これまでの調査では，下記の表 16 に示した格助詞が確認されている。

表 16：格助詞とその機能

格の名称	形式	格助詞としての主な機能
主格	*=N / =ga*	主語
属格	*=no / =N*	名詞句の従属部，連体節中の主語
対格	*φ / =o*	直接目的語
与格	*=i*	間接目的語，方向
所格	*=ni*	存在の場所，間接目的語，方向
具格	*=de*	手段，動作の場所
共格	*=to*	共同
比格	*=(N)jori*	比較
奪格	*=kara*	起点
限界格	*=made*	限界

７．２．１　主格＝N / =ga

主格は基本的に *=N* である。語末が撥音 N の語の場合，*=ga* が現れる。主語を表す。

(33) a. ソコノ　　ハシラン　タオレタラ　タェーヘンヤデ…
soko=no　　hasira=N　taore-tara　　taiheN=ja=de...
そこ=GEN　　柱=NOM　　倒れる-CND　大変=COP=CNC
「そこの柱が倒れたら大変だから・・・」

b. ソコノ　　カンバンガ　タオレタラ…
soko=no　　kaNbaN=ga　taore-tara ...
そこ=GEN　　看板=NOM　　倒れる-CND
「そこの看板が倒れたら・・・」

７．２．２　属格＝no / =N

属格は基本的に *=no* で表されるが，名詞句の修飾部となる場合，後続の名詞が歯（茎）音始まりであると *=N* となることがある。さらに，修飾部となる名詞が N（撥音）で終わり，後続の名詞句が歯（茎）音で始まる場合には，表面的には属格助詞が現れないこともある。これは，*boRsaN=N*（lit.「坊さんの」）の 2 つ重なった撥音 N が単純化された結果と見る。

(34) a. タローノ　イエ
taroR=no　ie
太郎=GEN　家
「太郎の家」

b. タローン　トコ
taroR=N　toko
太郎=GEN　所
「太郎のところ」

c. ボーサンノ　イエ
boRsaN=no　ie
坊さん=GEN　家
「坊さんの家」

d. ボーサン　トコ
boRsaN　toko
坊さん　所
「坊さんのところ」

７．２．３　対格 φ / =o

対格は，基本的に無助詞（φ）で表される（35a）[9]。*=o* は，目的語名詞句と述語動詞が隣接しない場合に現れやすい（35b）。

(35) a. イヌン　オレ　ミトルケド…
inu=N　ore　mi-tor-u=kedo...
犬=NOM　1　見る-PF-NPST=CNC
「犬が俺を見ているけど（腹が減ったのだろうか）」

b. イヌン　オマェーオ　ジット　ミトルケド…
inu=N　omai=o　zitto　mi-tor-u=kedo...
犬=NOM　2=ACC　じっと　見る-PF-NPST=CNC
「犬がお前をじっと見ているけど…」

なお，1 モーラ語は，当該母音が延長された長音形が現れる（36a）。これは，2 モーラ以上の語における無助詞に相当すると思われるが，一方で，2 モーラ以上の語でも長音形が見られる（36b）。その詳細は不明である。

(36) a. ユー　ワカス
juR　wakas-u
湯　沸かす-NPST
「湯を沸かす」

b. オマェー　コーモ　ジョーブィー　ツクエー　コワェータンカ
omai　koR=mo　zjoRbu-i　cukueR　kowai-ta=N=ka
2　こう=ADT　丈夫-NPST　机　壊す-PAST=NLZ=Q
「お前は，こんなに丈夫な机を壊したのか」

[9] 現状，この対格（目的語）の無助詞現象が，助詞の脱落と見るべきものなのか，あるいは無助詞（φ）であることを積極的に対格を標示する形式として認めるべきなのか，検討が十分ではない。また，提題形（TOP）も，無助詞で現れることがあり，両者の区別は単純にできるものではない。よって，本稿では，この点についての議論を保留し，グロス（例文の 3 行目）においては，有形の *=o* が現れた時のみ ACC とグロスを振ることとし，無形の場合には ACC のグロスを振らないこととする。提題形についても同様に有形の *=wa* が現れた時のみ TOP のグロスを付す。

７．２．４　与格=i と所格=ni

与格=*i* と所格=*ni* は，以下の表 17 に示すように，その機能・用法の重なるところがある。

表 17：与格と所格の機能・方法

	目標	発話相手	着点	受益者①	受益者②	被使役者	変化結果	直面対象	受身動作主	経験者	所有者	時間	場所
与格=*i*	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×
所格=*ni*	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

(37) タローワ　{トーキョェー /*トーキョーニ}　デカケヤータ（目標）
taroR=wa　{toRkyo=i　/ *toRkyoR=ni}　dekake-jaR-ta
太郎=TOP　{東京=DAT　/ *東京=LOC}　出かける-HON-PST
「太郎は東京に出かけた」

(38) タローワ　{オトトェー / オトトニ}　ハナシカケタ（発話相手）
taroR=wa　{ototo=i　/ ototo=ni}　hanas-i+kake-ta
太郎=TOP　{弟=DAT　/ 弟=LOC}　話す-INF+かける-PST
「太郎は弟に話しかけた」

(39) タローワ　{トーキョェー /トーキョーニ}　ツィータ（着点）
taroR=wa　{toRkyo=i　/ toRkyoR=ni}　cui-ta
太郎=TOP　{東京=DAT　/ 東京=LOC}　着く-PST
「太郎は東京に着いた」

(40)と(41)の例からは，同じ受益者であっても直接に物質を与えられる場合とそうでない場合とで，与格=*i*が許容されるかに差があることが分かる。より詳細な調査が必要であろう。

(40) タローワ　{オトトニ /オトトェー}　ジブンノ　イエオ　ヤッタ（受益者1）
taroR=wa　{ototo=ni　/ ototo=i}　zibuN=no　ie=o　jaQ-ta
太郎=TOP　{弟=LOC　/ 弟=DAT}　RFL=GEN　家=ACC　与える-PST
「太郎は弟に自分の家をやった」

(41) タローワ　{イモトニ / *イモトェー}　ホン　ヨンダッタ（受益者2）
taroR=wa　{imoto=ni　/ *imoto=i}　hoN　joN-daQ-ta
太郎=TOP　{妹=LOC　/ *妹=DAT}　本　読む-BEN-PST
「太郎は妹に本を読んでやった」

被使役者・変化結果・直面する対象・受身の動作主・経験者主語・所有者・時間・場所を表す場合には，基本的に=*ni*しか許容されない。(43)で現れる=*N*という形式は，=*ni*の後に/n/で始まる語があることによる撥音化現象によるものと考えられる。

(42) タローワ　{イモトニ / *イモトェー}　ヤサイオ　クワセタ（被使役者）
taroR=wa　{imoto=ni / *imoto=i}　jasai=o　kuw-ase-ta
太郎=TOP　{妹=LOC / *妹=DAT}　野菜=ACC　食う-CAUS-PST
「太郎は妹に野菜を食べさせた」

(43) タローワ　{センセーニ / センセーン}　ナッタ（変化結果）
taroR=wa　{seNseR=ni / seNseR=N}　naQ-ta
太郎=COP　{先生=LOC / 先生=LOC}　なる-PST
「太郎は先生になった」

(44) タローワ　ガッコーデ　{トモダチニ / *トモダチー}　アッタ（直面対象）
taroR=wa　gaQkoR=de　{tomodaci=ni / *tomodaci=i}　aQ-ta
太郎=TOP　学校=INST　{友達=LOC / *友達=DAT}　会う=PST
「太郎は学校で友達に会った」

(45) タローワ　{イモトニ / *イモトェー}　ナグラレタ（受身動作主）
taroR=wa　{imoto=ni / *imoto=i}　nagur-are-ta
太郎=TOP　{妹=LOC / *妹=DAT}　殴る-PASS-PST
「太郎は妹に殴られた」

(46) タローニワ　オレノ　キモチン　ワカラン（経験者）
taroR=ni=wa　ore=no　kimoci=N　wakar-aN
太郎=LOC=TOP　1=GEN　気持ち=NOM　分かる-NEG.NPST
「太郎には俺の気持ちは分からない」

(47) タローニワ　ヨメン　ナェー（所有者）
taroR=ni=wa　jome=N　na-i
太郎=LOC=TOP　嫁=NOM　無い-NPST
「太郎には嫁がいない」

(48) タローワ　サンジニ　ウチー　モドッタ（時間）
taroR=wa　saN-zi=ni　uci-i　modoQ-ta
太郎=TOP　三-時=LOC　家=DAT　戻る-PST
「太郎は三時にうちに戻った」

(49) カベニ　トケーン　カカットル（場所）
kabe=ni　tokeR-N　kakaQ-tor-u
壁=LOC　時計=NOM　掛かる-PF-NPST
「壁に時計がかかっている」

７．２．５　具格=de

道具や原因は，具格=*de* で表される。

(50) タローワ　ショッキオ　オケデ　アラットル
taroR=wa　sjoQki=o　oke=de　araQ-tor-u
太郎=TOP　食器=ACC　桶=INST　洗う-PF-PST
「太郎は食器を桶で洗っている」

(51) ホーチョーデ　ユビオ　キッタ
hoRcjoR=de　jubi=o　kiQ-ta
包丁=INST　指=ACC　切る-PST
「包丁で指を切った」

７．２．６　共格=to

共格（〜とともに）は，=*to* である。

(52) タローワ　オトトト　アソンドル
taroR=wa　ototo=to　asoN-dor-u
太郎=TOP　弟=ASC　遊ぶ-PF-NPST
「太郎は弟と遊んでいる」

７．２．７　比格=(N)jori

比較対象は，=*(N)jori* で表される。=*Njori* と=*jori* の 2 つの形式が確認されているが，その分布の詳細は明らかではない。

(53) タローワ　{オトト（ン）ヨリ / オヤジヨリ/ *オヤジンヨリ}　セン　タカェー
taroR=wa　{ototo=(N)jori / ojazi=jori / *ojazi=Njori}　se=N　taka-i
太郎=TOP　{弟=CMP / 親父=CMP / *親父=CMP}　背=NOM　高い-NPST
「太郎は{弟より/父親より}背が高い」

７．２．８　奪格=kara

奪格=*kara* は，動作の時間的・空間的起点を表す他，「もらう」などの受取動詞文における授与者を表す。

(54) タローワ　イエカラ　ソトェー　デタ
taroR=wa　ie=kara　soto-i　de-ta
太郎=TOP　家=ABL　外=DAT　出る-PST
「太郎は家から外に出た」

(55) タローワ　{オヤカラ/オヤニ}　カネ　モラッタ
taroR=wa　{oja=kara / oja=ni}　kane　moraQ-ta
太郎=TOP　{親=ABL / 親=LOC}　金　貰う-PST
「太郎は親に金をもらった」

７．２．９　限界格=made

限界格=*made* は，限界点を表す。

(56) タローワ　イエマデ　アルィーテ　カエッテッタ
taroR=wa　ie=made　arui-te　kaeQ-teQ-ta
太郎=TOP　家=LMT　歩く-SEQ　帰る-SEQ.行く-PST
「太郎は家まで歩いて帰っていった」

７.３　とりたて助詞・提題助詞

これまでの調査では，=*mo*（累加），=*bakka*（反復），=*demo*（例示，極限）などのとりたて助詞が確認されているが，体系的な調査には至っていない。格助詞との共起関係についても今後の調査課題である。

(57) キョネンワ　エー　コトモ　ワルィー　コトモ　アッタ
kjoneN=wa　jo-i　koto=mo　waru-i　koto=mo　aQ-ta
去年=TOP　良い-NPST　事=ADT　悪い-NPST　事=ADT　ある-PST
「昨年は良いことも悪いこともあった」

(58) ケンカバッカ　シトッタ
keNka=bakka　si-toQ-ta
喧嘩=RPT　する-PF-PST
「喧嘩ばかりしていた」

(59) イモデモ　クットレヤ
imo=demo　kuQ-tor-e=ja
芋=EXM　食う-PF-IMP=SFP
「芋でも食べていろ」

主題を提示する際には，標準語の「は」に相当する助詞=*wa* が用いられる場合もあるが，無助詞である場合が多い（9.2 節も参照）。

(60) ミズ(ワ)　ドコニ　アル
mizu(=wa)　doko=ni　ar-u
水(=TOP)　何処=LOC　ある-NPST
「水はどこにあるの？」

７．４　名詞句の修飾部

修飾部には，名詞句・形容詞・連体詞・連体節が立つ。

(61) a. タローノ　　オトト
taroR=no　　ototo
太郎=GEN　　弟
「太郎の弟」

b. サワガシー　　コデモ　　センセーガ　チューイシヤー　シズカン　ナルワ
sawagasi-i　　ko=demo　　senseR=ga　　cjuRi+si-jaR　　sizuka-N　　nar-u=waR
騒がしい-NPST　子=EXM　　先生=NOM　　注意+する-CND　　静か=LOC　なる-NPST=SFP
「騒がしい子でも先生が注意すれば静かになる」

c. コンナ　イエニ　スミタェー
koNna　ie=ni　　sum-ita-i
こんな　家=LOC　住む-DES-NPST
「こんな家に住みたい」

d. キンノー　ミトッタ　　テレビニ　　タローガ　　デテリャータ
kiNnoR　　mi-toQ-ta　　terebi=ni　　taroR=ga　　de-ter-jaR-ta.
昨日　　見る-PF-PST　テレビ=LOC　太郎=NOM　　出る-PF-HON-PST
「昨日見ていたテレビに太郎が出ていた」

７．５　名詞句の主要部

名詞句の主要部には普通名詞の他，*toko*「ところ」，*toki*「時」等の形式名詞が立つ。

(62) ヒマナ　　トキニ　　キテチョー
hima=na　　toki=ni　　ki-te#cjoR
暇=COP　　時=LOC　　来る-SEQ#BEN.HON.IMP
「暇な時に来てください。」

(63) タローン　トコ
taroR=N　　toko
太郎=GEN　所
「太郎のところ」

また，属格助詞=*no*が形式名詞として機能する場合がある。

(64) キョー　コンノワ　ダレヤ
kjoR　ko-N=no=wa　dare=ja
今日　来る-NEG.NPST =GEN=TOP　誰=COP
「今日来ないのは誰だ？」

８．述語句

８．１　動詞述語

８．１．１　主動詞と補助動詞

主動詞と補助動詞の句の構造は，動詞中止形（*-te ~ -de*）あるいは不定形に補助動詞語幹が続く形となる。補助動詞として現れる動詞は，以下のものが挙げられる。

(65)　a. 中止形に続くもの
- *kure-*「〜てくれる」
- *kudare-*「〜てくださる」
- *cjoRdai(s)-*「〜てくれる」

b. 不定形に続くもの
- *kaker-*「〜しかける」
- *kakar-*「〜しかかる」
- *owar-*「〜し終える」
- *hazimer-*「〜し始める」
- *cuzuker-*「〜し続ける」

(65a)は主に授受に関わるものであり，(65b)は主にアスペクトに関わるものである。それぞれの例については，9.6.2節と9.10.2節を参照のこと。

なお，これらの他にも，*-tema(w)- ~ -dema(w)-*（「〜てもらう」「〜てしまう」）という形式と，*-tar- ~ -dar-*（「〜てやる」「〜てある」）という形式がある。2つの*-tema(w)-*は，それぞれ語源的に*-te#moraw-*と*-te#simaw-*に遡るものと考えられるが，筆者の調査では「〜てもらう」「〜てしまう」のどちらの意味であっても，**-te=wa ma(w)-*のように*-te*の後に他の要素を挿入することができない。つまり，文法化が相当程度進んでいると言える。なお，両者はアクセント上の区別があり，概略，「〜てもらう」の意味では，動詞述語全体が平板型，「〜てしまう」の意味では起伏型となる。

一方，*-tar-*の場合は，*-te=wa jar-*（「〜てはやる」）や*-te=wa ar-*（「〜てはある」）のように，*-te*の後に*=wa*など他要素を挿入することができる（9.10.2節）。なお，これらの2つの-tar-についても，アクセント上の区別があり，概略，「〜てやる」の意味では動詞述語全体が平板型，「〜てある」の意味では起伏型となる。

木曽川方言では，この他に，動詞中止形*-te, -de*に種々の補助動詞が融合した形式が複数見られる（9.10.2節）。本稿では，（完了相接辞*-tor-*を除き）便宜的にこれらの形式を「中止形+しまう」などとして記述することとする（グロスは「SEQ.しまう」などとする）。これは，もちろん共時的な分析に通時的な語源意識を持ち込む形になり，やや共時的な記述としては妥当性を欠

くものとなる。しかし，これら「中止形＋補助動詞」に由来する諸形式の文法化の度合いが様々であり，また，その詳細な調査も不十分であるため，あくまで暫定的な処置として，このように記述することとしたい。

８．１．２　終助詞

これまでの調査で，終助詞としては，勧誘を表す=*mai*[=mæ:]，疑問を表す=*ka*，=*kai*[=kæ:]，禁止の=*na*，依頼など行為指示表現と共起する=*eka*，伝達態度に係わる=*ne(R)*，=*jo*，=*wa.i*，=*zo*，=*gaja* ~ *gjaR*，=*gana*，=*gane*，丁寧さと伝達態度を表す=*namo*，=*gai*[gæ:]，非対話的な=*na(R)*，=*wa*などが認められている。その詳細については，今後の課題である。なお，例は9.9節にまとめてあげる[10]。

８．１．３　接続助詞

副詞節を導く接続助詞としては，=*de*（原因・理由），=*to*（条件・継起），=*ni*（逆接 1），=*kedo*（逆接 2），=*ga*（逆接 3）がある。これらは，動詞（コピュラ含む）や形容詞の終止形に接続する。なお，このうち，=*to* は，テンス標示はなく，非過去形にしか続かない。

(66) キンノー　アタマン　イタカッタデ　イツモヨリ　ハヨ　ネタ
kiNnoR　atama=N　ita-kaQ-ta=de　icumo=jori　haja-u　ne-ta
昨日　頭=NOM　痛い-VLZ-PST=CSL　いつも=CMP　早い-INF　寝る-PST
「昨日は，頭が痛かったので，いつもより早く寝た」

(67) マド　アケルト　ツメタェー　カゼン　ハェーッテキタ
mado　aker-u=to　cumeta-i　kaze=N　haiQ-te#ki-ta
窓　開ける-NPST=CND　冷たい-NPST　風=NOM　入る-SEQ#来る-PST
「窓を開けると冷たい風が入ってきた」

(68) コノ　リンゴワ　タカカッタニ　チョットモ　アマナェー
kono　riNgo=wa　taka-kaQ-ta=ni　cjoQto=mo　ama#na-i
この　りんご=TOP　高い-VLZ-PST=CNC　少し=ADT　甘い#NEG-NPST
「この林檎は高かったのに，少しも甘くない」

(69) イエニ　イッテミタケド　オラナンダ
ie=ni　iQ-te#mi-ta=kedo　or-anaNda
家=LOC　行く-SEQ#見る-PST=CNC　居る-NEG.PST
「家に行ってみたけれど，いなかった」

補文を導くものには，引用を表す=*to*「って」，疑問文を埋め込む疑問助詞=*ka* とがある。

[10] =*kai* や=*gai* に共通して現れる-*i* という形式を，「同等以上あるいは丁寧」を標示するものとする見方もある（愛知県教育委員会 1985: 29）。関連して，筆者らの調査では，コピュラ-*ja(R)*に対して，=*jai*[jæ:]という形の方が丁寧である，という話者もいた。この点については，さらなる調査が必要である。

(70) イシャニ　ナッタ　ヒトガ　オルト　キートッタガ　ダレガ　イシャヤノ
isja=ni　naQ-ta　hito=ga　or-u=to　kiR-toQ-ta=ga　dare=ga　isja=ja=no
医者=LOC　なる-PST　人=NOM　居る-NPST=QT　聞く-PF-PST=CNC　誰=NOM　医者=COP=SFP
「医者になった人がいると聞いたけど，誰が医者なの？」

(71) オレワ　オヤジガ　ナニオ　ノムカ　シラン
ore=wa　ojazi=ga　nani=o　nom-u=ka　sir-aN
1=TOP　親父=NOM　何=ACC　飲む-NPST=Q　知る-NEG.NPST
「俺は，おやじが何を飲むか知らない。」

８．２　名詞述語

名詞述語は，名詞句にコピュラ動詞で構成される。さらに終助詞が続く場合もあるが，コピュラ動詞・終助詞はどちらも必須要素ではない。ただし，コピュラの出没の条件については，不明である。

(72) アシタワ　ヤスミヤ(ワ)(ナモ)
asita=wa　jasumi=ja(=wa)(=namo)
明日=TOP　休み=COP(=SFP)(=SFP)
「明日は休みだ（よ）」

(73) ワシャー　ウナギ
wasjaR　unagi
1.TOP　鰻
（注文の際に）「俺は，うなぎ」

９．構文とその機能

９．１　基本語順

この方言の基本語順は，自動詞主語・他動詞主語をまとめて S，直接目的語を O，二重目的語他動詞文における間接目的語を E で表せば，S(E)(O)V である。

９．２　格配列と語順と主題

木曽川方言の格配列パターンは，自動詞主語 S と他動詞主語 A とが同じ格標示（*=N* / *=ga*）となる一方，他動詞目的語 O がそれらとは異なる格標示となる（φ / *=o*），主格対格型の格配列パターンである。主格に有形の格標示が現れる一方，基本的には対格が無形となる，典型的な有標主格タイプの方言であると言える。これまでの調査からは，この方言では，主語・目的語の有生性や動作主性や特定性などが格配列に影響を与える証拠は得られていない。

ただし，この方言では主題となる名詞句も無助詞（φ）で現れるために，主語が主題となる場合，主語名詞句も目的語名詞句もどちらも無助詞で現れることがあり得る。この場合，「主語（＝主題）＋目的語＋述語」の語順であれば，主語（＝主題）・目的語共に無助詞が許容されるが，「目的語＋主語（＝主題）＋述語」の語順となる場合には，目的語は有形の格標示(*=o*)とならなければならない。

(74) a. オレノ　トモダチ　コドモンター　ミトル
ore=no　tomodaci　kodomo-NtaR　mi-tor-u
俺=GEN　友達　子供-PL　見る-PF-NPST
b. コドモンターオ　オレノ　トモダチ　ミトル
kodomo-NtaR=o　ore=no　tomodaci　mi-tor-u
子供-PL=ACC　俺=GEN　友達　見る-PF-NPST
c. *コドモンター　オレノ　トモダチ　ミトル
*kodomo-NtaR　ore=no　tomodaci　mi-tor-u
*子供-PL　俺=GEN　友達　見る-PF-NPST
「俺の友達は子どもたちを見ている」

また，文頭で無助詞の名詞句は主題として解釈されやすいためか，主語名詞句が主格助詞によってマークされ，文法関係が明らかな場合にあっても，目的語名詞句が主題でない場合には，それを文頭に置くことができない。目的語および主題提示における無助詞現象と語順の関係についての詳細は，今後の調査課題である。

(75) a. カゼン　ボーシ　フキトバェータ
kaze=N　boRsi　huk-i+tobai-ta
風=NOM　帽子　吹く-INF+飛ばす-PST

b. *ボーシ　カゼン　フキトバェータ
*boRsi　kaze=N　huk-i+tobai-ta
帽子　風=NOM　吹く-INF+飛ばす-PST
「風が帽子を吹き飛ばした」

９．３　項数による文の分類と他動性

９．３．１　1 項文(SV)

主語と述語のみからなる 1 項文においては，述語の種類によらず，主語は=*N* / =*ga* で標示される。

(76) タローン　アルィートッタ
taroR=N　arui-toQ-ta
太郎=NOM　歩く-PF-PST
「太郎が歩いていた」

(77) ヨーキガ　エー
joRki=ga　jo-i
天気=NOM　良い-NPST
「天気が良い」

９．３．２　2 項文(AOV)

主語と目的語と述語からなる 2 項文においては，主語名詞句と目的語名詞句の有生性などに関わらず，主語は=*N* / =*ga*，目的語は φ / =*o* で標示される。=*o* は，基本語順を逸脱する場合や，目的語と述語動詞が隣接しない場合などに現れやすい。なお，使役接辞で派生された動詞による他動詞文における格配列については 9.6.1 節を参照。

(78) センセーガ　ツクエ　ハコンドッタ
seNseR=ga　cukue　hakoN-doQ-ta
先生=NOM　机　運ぶ-PF-PST
（ふと見ると）「先生が机を運んでいた」

(79) タローン　ソト　ミトル
taroR=N　soto　mi-tor-u
太郎=NOM　外　見る-PF-NPST
「太郎が外を見ている」

９．３．３　3 項文(AEOV)

主語(A)・直接目的語(O)・間接目的語(E)をとる非派生の 3 項述語としては，*jar*-「やる」などの授与動詞の他，*okur*-「送る」などが確認されている。この時，間接目的語となる E 項の格標示は=*i*（与格）でも=*ni*（所格）でも可能である。

(80) タローワ　{オトトニ / オトトェー}　ジブンノ　イエオ　ヤッタ
taroR=wa　{ototo=ni / ototo=i}　zibuN=no　ie=o　jaQ-ta
太郎=TOP　{弟=LOC / 弟=DAT}　RFL=GEN　家=ACC　やる-PST
「太郎は弟に自分の家をやった」

(81) タローワ　{オトトニ / オトトェー}　オカネ　オクッタ
taroR=wa　{ototo=ni / ototo=i}　o-kane　okuQ-ta
太郎=TOP　{弟=LOC / 弟=DAT}　POL-金　送る-PST
「太郎は弟にお金を送った」

一方，2 項文から使役によって派生された 3 項文の場合，E（被使役者）の格標示として*=i* は許容されず，*=ni* のみ用いられる。

(82) タローワ　{イモトニ / *イモトェー}　ヤサイオ　クワセタ
taroR=wa　{imoto=ni / *imoto=i}　jasai=o　kuw-ase-ta
太郎=TOP　{妹=LOC / *妹=DAT}　野菜=ACC　食う-CAUS-PST
「太郎は妹に野菜を食べさせた」

９．４　文タイプ

動詞述語文の平叙文，疑問文（疑問詞・諾否），命令文の例を挙げる。

(83) オレノ　オヤジワ　マェーバン　サケ　ノンドル
ore=no　ojazi=wa　maibaN　sake　noN-dor-u
1=GEN　親父=TOP　毎晩　酒　飲む-PF-NPST
「俺の父親は毎晩酒を飲んでいる」

(84) オマェーサンノ　オトッツァンワ　マェーバン　サケ　ノムノ
omai-saN=no　otoQcaN=wa　maibaN　sake　nom-u=no
2-HON=GEN　お父さん=TOP　毎晩　酒　飲む-NPST=SFP
「あなたのお父さんは毎晩酒を飲むのか？」

(85) オヤジワ　ナニ　ノムカェーノー
ojazi=wa　nani　nom-u=kai=noR
親父=TOP　何　飲む-NPST=Q=SFP
「父親は何を飲むかな」

(86) グズグズシトラズニ　ハヨ　ノメ
guzuguzu+si-tor-azuni　haja-u　nom-e
ぐずぐず+する-PF-SEQ.NEG　早い-INF　飲む-IMP
「ぐずぐずしていないで，早く飲め」

名詞述語文の平叙文，疑問文（疑問詞・諾否）の例を挙げる。

(87) オレノ　　オヤジワ　　イシャヤ
ore=no　　ojazi=wa　　isja=ja
1=GEN　　親父=TOP　　医者=COP
「俺の父親は医者だ」

(88) ツレカラ　　キータケンド　　オマェーサンノ　　オトッツァンワ　　イシャカェ
cure=kara　　kiR-ta=keNdo　　omai-saN=no　　otoQcaN=wa　　isja=kai
友達=ABL　　聞く-PST=CNC　　2-さん=GEN　　お父さん=TOP　　医者=Q
「友達から聞いたんだけど，君のお父さんは医者なの？」

(89) イシャニ　ナッタ　　ヒトガ　オルト　　キートッタガ　　ダレガ　イシャヤノ
isja=ni　　naQ-ta　　hito=ga　or-u=to　　kiR-toQ-ta=ga　　dare=ga　isja=ja=no
医者=LOC　なる-PST　　人=NOM　いる-NPST=QT　聞く-PF-PST=CNC　誰=NOM　医者=COP=SFP
「医者になった人がいると聞いたけど，誰が医者なの？」

形容詞述語文の平叙文，疑問文（疑問詞・諾否）の例を挙げる。

(90) オレノ　　オヤジワ　オソガェー
ore=no　　ojazi=wa　osoga-i
1=GEN　　親父=TOP　怖い-NPST
「俺の父親は怖い」

(91) ハナシニ　キートッタケンド　オマェーサンノ　オトッツァンワ　オソガェーノ
hanasi=ni　kiR-toQ-ta=keNdo　omai-saN=no　otoQcaN=wa　osoga-i=no
話=LOC　聞く-PF-PST=CNC　2-さん=GEN　お父さん=TOP　怖い-NPST=SFP
「話に聞いたんだけど，君のお父さんは怖いの？」

(92) センセーノ　ナカデワ　　ダレガ　　イチバン　オソガェーノ
seNseR=no　naka=de=wa　dare=ga　ici-baN　osoga-i=no
先生=GEN　　中=INST=TOP　誰=NOM　一-番　　怖い-NPST=SFP
「先生の中では誰が一番怖いの？」

９．５　肯否

動詞述語文の否定は否定接辞によって表される。

(93) a. ワシャー　ネルト　　イツモ　ユメオ　　ミルワナモ
wasjaR　ner-u=to　　icumo　jume=o　　mir-u=wa=namo
1.TOP　寝る-NPST=CND いつも　夢=ACC　見る-NPST=SFP=SFP
「私は寝るといつも夢を見る」

b. ワシャー　ネテモ　　ユメワ　　ミーヘンワ
wasjaR　ne-temo　　jume=wa　mi-RheN=wa
1.TOP　寝る-CNC　夢=TOP　見る-NEG.NPST=SFP
「私は寝ても夢は見ない」

形容詞述語文，名詞述語文の否定は，否定形容詞によって表される。

(94) a. タローワ　アシガ　　ハヤェー
taroR=wa　asi=ga　　haja-i
太郎=TOP　足=NOM　速い-NPST
「太郎は足が速い」

b. ジローワ　　アシガ　　ハヤナイ
ziroR=wa　　asi=ga　　haja#na-i
次郎=TOP　　足=NOM　速く#NEG-NPST
「次郎は足が速くない」

(95) a. ワシャー　センセーヤッタワイ
wasjaR　seNseR=jaQ-ta=wa.i
1.TOP　先生=COP-PST=SFP
「私は先生だった」

b. ワシャー　センセーヤナカッタ
wasjaR　seNseR=ja#na-kaQ-ta
1.TOP　先生=COP#NEG-VLZ-PST
「私は先生でなかった」

９．６　ヴォイス

９．６．１　受動と使役

使役は接辞*-(s)ase-*を前接する動詞に接続して表す。使役者の項を主語に追加し，被使役者（元の能動文の主語）は*=o*または*=ni*で標示する。但し，前接動詞が他動詞の場合は必ず*=ni*で標示する（=96a)。自動詞の場合のみ，*=o*と*=ni*のいずれでも標示が可能である（=96b,c)。強制・許

可・放任用法における接辞の別はない。

(96) a. タローニ　オモチャオ　　カワセタ
taroR=ni　omocja=o　　kaw-ase-ta
太郎=LOC　おもちゃ=ACC　買う-CAUS-PST
「太郎におもちゃを買わせた」
b. オトトオ　アルカセタ
ototo=o　　aruk-ase-ta
弟=ACC　　歩く-CAUS-PST
「弟を歩かせた」
c. オトトニ　アルカセタ
ototo=ni　　aruk-ase-ta
弟=LOC　　歩く-CAUS-PST
「弟に歩かせた。」

受動は接辞*-(r)are-*を前接する動詞に接続して表す。対応する能動文の目的語を主語とし，元の主語（動作主）は補語（*=ni*あるいは*=kara*で標示）とする。但し，受動文の主語が前接動詞の表す事態の項とならない場合は，追加項を主語にすえる。受動文の動作主は*=ni*または*=kara*で標示し，動作対象は*=o*で標示する。なお，標準語と同様，間接受身文では動作主を*=kara*で標示することは許容されない。他動詞を前接動詞とする受身文（97a,b,c）とともに，自動詞を前接動詞とする受身文も生産できる（=97d）。

(97) a. タローワ　{センセーニ / センセーカラ}　　ナグラレヤータ
taroR=wa　{seNseR=ni　/ seNseR=kara}　　nagur-are-jaR-ta
太郎=TOP　{先生=LOC　/ 先生=ABL}　　殴る-PASS-HON-PST
「太郎は先生に殴られた」
b. タローワ　{ダレヤシャンニ / ダレヤシャンカラ}　サェーフオ　ヌスマレタ
taroR=wa　{darejasjaN=ni　/ darejasjaN=kara}　saihu=o　nusum-are-ta
太郎=TOP　{誰か=LOC　/ 誰か=ABL}　財布=ACC　盗む-PASS-PST
「太郎は誰かに財布を盗まれた」
c. タローワ　ムスコー　　ホメラレヤータ
taroR=wa　musuko=o　　home-rare-jaR-ta
太郎=TOP　息子=ACC　　褒める-PASS-HON-PST
「太郎は息子を褒められた」

d. セキオ　トットッタノニ　　シラナェ　　ヒトニ　スワラレテマッタ
seki=o　toQ-toQ-ta=no=ni　　sira-na-i　　hito=ni　suwar-are-temaQ-ta
席=ACC　取る-PF-PST=NLZ=CNC　知る-NEG-NPST　人=DAT　座る-PASS-SEQ.しまう-PST
「席をとっていたのに，知らない人に座られてしまった」

使役と受動の組み合わせも可能である（98）。

(98) タローワ　センセーニ　キョーカショー　ミサセラレタ
taroR=wa　seNseR=ni　kjoRkasjo=o　　mi-sase-rare-ta
太郎=TOP　先生=LOC　教科書=ACC　　見る-CAUS-PASS-PST
「太郎は先生に教科書を見させられた」

９．６．２　自他交替，逆使役，相互文

自他交替は，以下のような代表的なパターンが標準語と同様に使用される。但し，*+kas-*パターンでは，標準語にはみられない*her-・herakas-*のような組み合わせも使用される。その外延の調査が課題として残される。

- 自動詞を基本とする組み合わせ：*ak-・aker-*「開く・開ける」(+e)，*sir-・siras-*「知る・知らせる」(+as)，*nor-・noser-*「乗る・乗せる」(+se)，*ner-・nekas-*「寝る・寝かす」(+kas)
- 他動詞を基本とする組み合わせ：*sas-・sasar-*「刺す・刺さる」(+ar)，*war-・warer-*「割る・割れる」(+er)
- 自他同形：(=*ga* / =*o*) *hirak-*「開く」
- 意味的に対応する組み合わせ：*sin-・koros-*「死ぬ・殺す」
- 上記以外：*kimar-・kimer-*「決まる・決める」，*taorer-・taos-*「倒れる・倒す」，*okir-・okos-*「起きる・起こす」，*mitir-・mitas-*「満ちる・満たす」，*arer-・aras-*「荒れる・荒らす」，*toRr-・toRs-*「通る・通す」

逆使役（自発）は，*kitawar-*（「鍛える」の逆使役・自発形），*obowar-*（「覚える」の逆使役・自発形），*akar-*（「空く」の逆使役・自発形）が確認できたが，他の例は確認できなかった。*+ar-*による逆使役の生産性については今後の課題である。

以上のヴォイスに関わる形式の他，標準語と同様，*aw-*による相互文も使用する（99）。

(99) {オトコタチガ / オトコンターガ}　ナグリアットル
{otoko-taci=ga / otoko-NtaR=ga}　nagur-i+aQ-tor-u
{男-PL=NOM / 男-PL=NOM}　殴る-INF+合う-PF-NPST
「男たちが殴り合っている」

９．６．３　可能

肯定可能は，子音語幹動詞の場合，接辞*-e-*または*-(e)re-*を前接する動詞に接続する（100)。母音語幹動詞の場合は，前接する動詞の語幹末尾の母音を消去して接辞*-e-*を接続する（101)，いわゆる「ら抜き言葉」を使用する。「ら抜き言葉」の場合は，接辞*-(e)re-*は許容されない。なお，肯定可能において能力可能と状況可能の形式による区別は存在しない。

(100) a. タェーチョーガ　イーデ[11]　{イケル　/ イケレル}
taicjoR=ga　i-i=de　{ik-e-ru　/ ik-ere-ru}
体調=NOM　良い-NPST=CSL　{行く-POT-NPST / 行く-POT-NPST}
「体調が良いので行ける」

b. テンキガ　イーデ　{イケルワ　/ イケレルワ}
teNki=ga　i-i=de　{ik-e-ru=wa　/ ik-ere-ru=wa}
天気=NOM　良い-NPST=CSL　{行く-POT-NPST=SFP / 行く-POT-NPST=SFP}
「天気が良いので行けるわ」

(101) a. キョーワ　テンキガ　エーデ　フジサンガ　ミレル
kjoR=wa　teNki=ga　jo-i=de　huzisaN=ga　mi-re-ru
今日=TOP　天気=NOM　良い-NPST=CSL　富士山=NOM　見る-POT-NPST
「今日は天気が良いから富士山が見られる」

b. キョーワ　タェーチョーガ　エーデ　ソトニ　デレル
kjoR=wa　taicjoR=ga　jo-i=de　soto=ni　de-re-ru
今日=TOP　体調=NOM　良い-NPST=CSL　外=LOC　出る-POT-NPST
「今日は体調が良いから外に出られる」

否定可能は，肯定可能の接辞*-e*及び*-(e)re*の否定形に加え，*joR*＋否定形によって表す。なお，肯定可能において*joR*は使用しない。否定可能においての，能力可能と状況可能の形式による区別は存在しない。

[11] *jo-i=de*（エーデ）「良いので」の標準語形かと思われるも詳細は未調査。

(102) a. アシガ　イタェーノデ　キョーワ
asi=ga　itai=node　kjoR=wa
足=NOM　痛い=CSL　今日=TOP
{ヨー イカン / イケーセン / イケレーセン}
{joR ik-aN / ik-e-RseN / ik-ere-Rse-N}
{よく 行く-NEG.NPST / 行く-POT-NEG.NOST / 行く-POT-NEG.NPST }
「足が痛いので今日は行けない。」

b. アメガ　フッテルデ
ame=ga　huQ-ter-u-de
雨=NOM　降る-PF-NPST-CSL
{ヨー イカン / イケーセン / イケレーセン}
{joR ik-aN / ik-e-RseN / ik-ere-RseN}
{よく 行く-NEG.NPST / 行く-POT-NEG.NPST / 行く-POT-NEG.NPST}
「雨が降っているので行けない」

９．６．４　やりもらい

やりもらいは以下のように使用する。

表18：木曽川方言のやりもらい

		求心的恩恵		遠心的恩恵	
		非敬語形	敬語形	非敬語形	敬語形
与え手主語	本動詞	*kure-*	*kudarer-* *cjoRdai(s)-*	*jar-*	*age-*
	補助動詞	*te#kure-*	*te#kudarer-* *te#cjoRdai(s)-*	*te#jar-*	*te#age-*
受け手主語	本動詞	*moraw-*	*cjoRdai(s)-*		
	補助動詞	*-temaw-*	*-temaw-*[12]		

標準語のやりもらいの体系とは主に以下の点において異なる。

- 与え手を主語として求心的恩恵を表す場合，*kudarer-*及びその補助動詞形に加え，*cjoRdai(s)-*及びその補助動詞形を使用する（103）。
- 受け手を主語として求心的恩恵を表す場合，敬語形において *itadak-*「頂く」は用いず，非

[12] 目上に対しても非敬語形と同じ形を使用するが，*-temaw-*が敬語形であるかどうかは検討する余地がある。

敬語形の *moraw-*「貰う」または *cjoRdai(s)-*「頂戴する」を使用する。補助動詞形については，非敬語形，敬語形のいずれも*-temaw-*「〜てもらう」を使用する（104）。

・ 求心的恩恵の行為指示を表す場合，敬語形には，*cjoRdai*「頂戴」及び*-te#cjoRdai*「〜て頂戴」を使用する（105）[13]。動詞語幹 *cjoR* 及びその補助動詞形で行為指示を表す場合もある[14]が，この場合の敬意は他の形よりも下がる。なお，*moraw-*「貰う」及び*-temaw-*「〜てもらう」によって行為指示を表すことはできるが，*kudarer-*「くださる」及び *-te#kudarer-* 「てくださる」によって行為指示を表すことはできない。

(103) a. センセーガ　ホンオ　{チョーダェーシタ / チョーダェータ / チョータ}
seNseR=ga　hoN=o　{cjoRdaisi-ta / cjoRdai-ta / cjoR-ta}
先生=NOM　本=ACC　{頂戴する-PST / 頂戴する-PST / 頂戴する-PST}
「先生が本をくださった」

b. センセーガ　ホン　クダレタ
seNseR=ga　hoN　kudare-ta.
先生=NOM　本　下さる-PST
「先生が本をくださった」

c. センセーガ　ホンオ　{ヨンデチョーダェーシタ / ヨンデチョータ}
seNseR=ga　hoN=o　{joN-de#cjoRdaisi-ta / joN-de#cjoR-ta}
先生=NOM　本=ACC　{読む-SEQ#BEN.HON-PST / 読む-SEQ#BEN.HON-PST}
「先生が本を読んでくださった」

d. イツモ　センセーワ　ホンオ　ヨンデクダレル
icumo　seNseR=wa　hoN=o　joN-de#kudare-ru
いつも　先生=TOP　本=ACC　読む-SEQ#BEN.HON-NPST
「いつも先生は本を読んでくださる」

(104) a. センセーカラ　ホンオ　チョーダイシタ
seNseR=kara　hoN=o　cjoRdaisi-ta
先生=ABL　本=ACC　頂戴する.BEN.HON-PST
「先生から本をいただいた」

b. センセーニ　ホンオ　ヨンデマッタ
seNse=ni　hoN=o　joN-demaQ-ta
先生=LOC　本=ACC　読む-SEQ.もらう-PST
「先生に本を読んでいただいた」

[13] 「チョーダイ」に関しては，*cjoRs-*「チョース」＜*cjoRdai(s)-*「チョーダェース」＜*cjoRdai(s)-*「チョーダイスル」の順に丁寧さが増す。補助動詞形もこれに準ずる。
[14] 動詞語幹による行為指示は，*cjo*「チョ」及びその補助動詞形は許容されない。

(105) a. ソノ　ホンオ　チョーダイ
sono　hoN=o　cjoRdai
その　本=ACC　くれる.BEN.IMP
「(孫に対して) その本をくれ」
b. ホンオ　{ヨンデチョーダイマセ　/ ヨンデマエンカ}
hoN=o　{joN-de#cjoRdai-mas-e　/ joN-dema-e-N=ka}
本=ACC　{読む-SEQ#BEN.POL-POL-IMP / 読む-SEQ.もらう-POT-NEG.NPST=Q}
「本を読んでください」

９．７　コピュラ文とその周辺

名詞述語文は=*ja*を名詞句に付接して作られる。個人差があり，話者によっては=*da*を用いることもある。名詞句のタイプによって包摂（106a）と等価（106b）がありうるが，構文的相違は存在しない。

(106) a. タローワ　ガクセーヤワ
taroR=wa　gakuseR=ja=wa
太郎=TOP　学生=COP=SFP
「太郎は学生だ」
b. タローワ　ワシノ　チョーナンヤ
taroR=wa　wasi=no　cjoRnaN=ja
太郎=TOP　1=GEN　長男=COP
「太郎は私の長男だ」

モノや有生物の場所または存在を表す表現はいずれも「ある」「おる」で表される。場所を表す場合，A=*wa* B=*ni* *ar-u* または B=*ni* {A=*ga* / A=*N*} *ar-u* という構文をとる（107a,b)。一方，A=*ga* B=*ni* *ar-u*はとれない（107c)。

(107)　（お宅はどこにあるのかと聞かれて）
a. イエワ　キソガワニ　アル
ie=wa　kisogawa=ni　ar-u
家=TOP　木曽川=LOC　ある-NPST
「家は木曽川にある」
b. キソガワニ　イエン　アル
kisogawa=ni　ie=N　ar-u
木曽川=LOC　家=NOM　ある-NPST
「木曽川に家がある」

c. *イエガ　キソガワニ　アル
*ie=ga　kisogawa=ni　ar-u
家=NOM　木曽川=LOC　ある-NPST
「*家が木曽川にある」

存在を表す表現は B=*ni(=wa)* {A=*ga* / A=*N* / A=*wa*} *ar-u*という構文をとる（108）。

(108)　（木曽川に何がある？と聞かれて）
a. キソガワニ　クロダジョーシガ　アル
kisogawa=ni　kurodazjoRsi=ga　ar-u
木曽川=LOC　黒田城趾=NOM　ある-NPST
「木曽川に黒田城趾がある」
b. キソガワチョーニ(ワ)　クロダジョーシン　アル
kisogawa+cjoR=ni(=wa)　kurodazjoRsi=N　ar-u
木曽川+町=LOC(=TOP)　黒田城趾=NOM　ある-NPST
「木曽川に（は）黒田城址がある」
c. キソガワチョーニ　クロダジョーシワ　アル
kisogawa+cjoR=ni　kurodazjoRsi=wa　ar-u
木曽川+町=LOC　黒田城趾=TOP　ある-NPST
「木曽川に黒田城趾はある」

また，述語部分は主格名詞句の有生性によって「ある」（107, 108）と「おる」（109a）が使い分けられるが，移動可能な無生物も「おる」をとることができる（109b,c）。

(109)　a. アソコノ　ヒロバニ　ウマガ　オルワナモ
asoko=no　hiroba=ni　uma=ga　or-u=wa=namo
あそこ=GEN　広場=LOC　馬=NOM　いる-NPST=SFP=SFP
「あそこの広場に馬がいるね」
b. キョーワ　タクシー　ヨーケ　オルナモ
kjoR=wa　takusiR　joRke　or-u=namo
今日=TOP　タクシー　たくさん　いる-NPST=SFP
「今日はタクシーがたくさんいるね」

c. アソコニ　コワケタ　タクシーガ　アル
asoko=ni　kowake-ta　takusiR=ga　ar-u
あそこ=LOC　壊れる-PST　タクシー=NOM　ある-NPST
「あそこに壊れたタクシーがある」

所有を表す述語は「持つ」のみならず「ある」「おる」も許容される（110）。

(110) a. ワシャー　クルマ　ニダェー　モットルワイ
wasjaR　kuruma　ni-dai　moQ-tor-u=wai
1.TOP　車　二-台　持つ-PF-NPST=SFP
「私は車を二台持っている」
b. ワシワ　イエニ　クルマ　ニダェー　モットル
wasi=wa　ie=ni　kuruma　ni-dai　mot-tor-u
1=TOP　家=LOC　車　二-台　持つ-PF-NPST
「私は家に車を二台持っている」
c. ワシニワ　(イエニ)　クルマ　ニダェー　アル
wasi=ni=wa　(ie=ni)　kuruma　ni-dai　ar-u
1=LOC=TOP　(家=LOC)　車　二-台　ある-NPST
「私には家に車が二台ある」
d. ワシニワ　コキョーニ　オトトン　フターリ　{アル　/ オル}
wasi=ni=wa　kokjoR=ni　ototo=N　hutaRri　{ar-u　/ or-u}
1=LOC=TOP　故郷=LOC　弟=NOM　二人　{ある-NPST / いる-NPST}
「私には故郷に弟が二人ある/いる」

所有表現と場所・存在表現は，存在動詞を用いる点や，「キソガワニ」「ワシニワ」「イエニ」のように場所を示しうる点など共通するところがある（=107，108と110b,c,d）。ただし，場所・存在表現にあった有生性や移動の可否による存在動詞の使い分けは，所有表現においては中和し，有生物主語でも「ある」を用いることができる。他方，所有表現とコピュラ文は述語のタイプも述語の取り得る項の数も異なっている（=106と110）。なお，所有表現に「持つ」を用いることから，この言語が基本的には主格対格型であることを示唆する。

名詞句内部の所有表現は属格の*=no* / *=N*で表す（111。7.2.2節も参照）。所有者名詞句の有生性による違いはない（=111a,bと111c）。また被所有名詞句の有生性による違いもない（111aと111b）。譲渡可能性の違いによる句構造の違いも特になさそうである（=111bと111d）。

(111) a. オレノ　オヤジワ　オソガェー
ore=no　ojazi=wa　osoga-i
俺=GEN　親父=TOP　怖い-NPST
「俺の親父は怖い」
b. ワシノ　メオ　ミテチョー
wasi=no　me=o　mi-te#cjoR
1=GEN　目=ACC　見る-SEQ#BEN.IMP
「私の目を見てください」
c. サェーコロノ　メン　ソロッタ
saikoro=no　me=N　soroQ-ta
さいころ=GEN　目=NOM　そろう-PST
「さいころの目が揃った」
d. ワシノ　ハタオ　アンタニ　アェーマス
wasi=no　hata=o　aNta=ni　ai-mas-u
1=GEN　畑=ACC　2=DAT　あげる-POL-NPST
「私の畑をあなたにあげます」

９．８　テンス

動詞述語文のテンスは非過去*-(r)u*（=112, 113）と過去*-ta*（114）の対立を持つ。現在を表す場合，動作動詞では動詞語幹に*-joRr-*や*-tor-*を接続するが（9.10節），状態動詞の場合や，動作動詞で習慣や一般真理を表す場合には*-u*で現在を表すことができる（113）。また，接辞*-u*を接続した動作動詞は，動詞のタイプや文脈，人称によって意志や希求を表しうる（112）。未来を表す専用の接辞は存在しない。

(112) アシタワ　ワシン　イク
asita=wa　wasi=N　ik-u
明日=TOP　1=NOM　行く-NPST
「明日は私が行く」
(113) ニワニ　{イヌガ　/ イヌン}　オル
niwa=ni　{inu=ga　/ inu=N}　or-u
庭＝LOC　{犬=NOM　/ 犬=NOM}　いる-NPST
「庭に犬がいる」

(114) ワシワ　　キンノー　イエニ　　オッタ
wasi=wa　　kiNnoR　　ie=ni　　oQ-ta
1=TOP　　昨日　　家=LOC　　いる-PST
「私は昨日家にいた」

形容詞述語の場合も非過去*-i*（115）と過去*-ta*（116）の対立がある。ただし，過去形を作る場合，非過去の接辞*-i*が形容詞語幹に取り込まれている形容詞もある（116b)。

(115) オレノ　オヤジワ　　オソガェー
ore=no　ojazi=wa　　osoga-i
1=GEN　親父=TOP　　怖い-NPST
「俺の親父は怖い」

(116) a. ソレ　ヨカッタナモ
sore　jok-aQ-ta=namo
それ　良い-VLZ-PST=SFP
「それはよかったね」

b. オレノ　オヤジワ　ムカシワ　　オソガェーカッタナー
ore=no　ojazi=wa　mukasi=wa　　osogai-kaQ-ta=naR
1=GEN　親父=TOP　昔=TOP　　怖い-VLZ-PST=SFP
「俺の親父は昔は怖かったなあ」

９．９　モダリティ

屈折の語尾として現れるモダリティは，意志・命令である。このうち意志は，子音語幹動詞に *-o(R)*（117a)，母音語幹動詞及び「する」など変則的な活用の動詞に *-joR*（117b）を接続させて表現する。これらは対話的な申し出（117a）や非対話的な意志の表出（117b）として用いられることが多い。聞き手に対する行為の実行宣言は屈折接辞 *-u* で表す方が一般的である（9.8節の（112）も参照)。これらの機能分担は標準語と共通点がある[15]。

(117) a. アンタガ　　イカンノヤッタラ　　ワシン　　イコカ
aNta=ga　　ik-aN=no=jaQ=tara　　wasi=N　　ik-o=ka
2=NOM　　行く-NEG.NPST=NLZ=COP=CND　1=NOM　　行く-INT=Q
「あなたが行かないのなら私が行こうか」

[15] 標準語の「う」と動詞の言い切り形の機能分担については日本語記述文法研究会編（2003）を参照した。

b. ワシャー　アシタ　シビャーオ　ミヨーカナ
wasjaR　asita　sibjaR=o　mi-joR=ka=na
1.TOP　明日　芝居=ACC　見る-INT=Q=SFP
「私は明日芝居を見ようかな」

命令の形として少なくとも2つのタイプがある。一つは所謂命令形命令で違反矯正的な命令として現れる傾向にある（118）。子音語幹動詞の場合は*-e*を，母音語幹動詞の場合は*-jo*，「来る」の場合は*-i*，「する」の場合は*-jo*を動詞語幹に付接して作られる。もう一つは，動詞語幹に*-jaR*を付接した形をとる。こちらは現場指示的な命令として用いられる傾向にある（119）[16]。

(118) a. オイ　グズグズシトラズニ　ハヨ　ノメ
oi　guzuguzu+si-tor-azuni　haja-u　nom-e
おい　ぐずぐず+する-PF- SEQ.NEG　早い-INF　飲む-IMP
「おい，ぐずぐずしていないで早く飲め」

b. アンショーバンゴー　オソエヨ
aNsjoRbaNgoR　osoe-jo
暗証番号　教える-IMP
「（強盗に襲われて）暗証番号を教えろ」

c. コッチ　コイ
koQci　ko-i
こっち　来る-IMP
「こっちに来い」

d. グズグズシトラスト　ハヨ　ベンキョーシヨ
guzuguzu+si-tor-asuto　haja-u　beNkjoR+si-jo
ぐずぐず+する-PF-SEQ.NEG　早い-INF　勉強+する-IMP
「ぐずぐずしていないで早く勉強しろ」

(119) a. オチャ　イレタデー　ノミャー
ocja　ire-ta=deR　nom-jaR
お茶　淹れる-PST=CSL　飲む-IMP
「お茶淹れたから飲んでね」

[16] *-jaR* は話し手以外に利益がある場合に用いられている可能性もある。行為の「利益」や「選択性」の観点からさらに調査が必要である。なお，10.4 節も参照。

b. ハヨー　コージ　ヤリャー
haja-u　koRzi　jar-jaR
早い-INF　工事　やる-IMP
「早く工事しろ」

終助詞には次のものがある；意志形*-(j)o(R)*に接続し，勧誘を表す*=mai* [=mæ:]，疑問を表す*=ka*, *=kai* [=kæ:], 禁止の*=na*, 依頼など行為指示表現と共起する*=eka*, 伝達態度に係わる*=ne(R)*, *=jo*，*=wa.i*，*=zo*，*=gaja* ~ *gjaR*，*=gana*，*=gane*，丁寧さと伝達態度を表す*=namo*，*=gai* [gæ:]，認識や詠嘆[17]を表す非対話的な*=na(R)*，*=wa*など。終助詞の詳細な記述は現段階の調査結果からは難しいため，用例を列挙するに留め，今後の課題としたい。

(120) ココエ　イリャー　イッショニ　サケ　ノモマェー
koko=i[18]　ir-jaR　issjoni　sake　nom-o=mai
ここ=DAT　来る.HON-IMP　一緒に　酒　飲む-INT=SFP
「ここにおいで，一緒に酒を飲もうよ」

(121) アノ　カシワ　アレラ(ー)ガ　タベタンカ
ano　kasi=wa　are-ra(R)=ga　tabe-ta=N=ka
あの　菓子=TOP　あいつ-PL=NOM　食べる-PST=NLZ=Q
「あの菓子はあいつらが食べたのか？」

(122) ヤマノ　ムコーニワ　ナンカ　アルカェー
jama=no　mukoR=ni=wa　naN=ka　ar-u=kai
山=GEN　向こう=LOC=TOP　何=Q　ある-NPST=Q
「山の向こうには何かあるの？」

(123) モー　タローノ　シュクダェー　ミヤースナ
moR　taroR=no　sjukudai　mi-jaRs-u=na
もう　太郎=GEN　宿題　見る-HON-NPST=SFP
「(ためにならないから）もう太郎の宿題を見ないで」

[17] この用語は不適切だが，現時点でこの終助詞が何を表しているのかはっきりしないため，このように記述しておく。
[18] 音声的には[koko.e]であり，e の部分は標準語の方向格*=e*「へ」とも考えられる。しかし，ここでは，*=e* という助詞が本方言においては現在のところ認められていない点，oi という二重母音が融合した結果として，しばしば[œ:]ではなく[oe]と実現しうる点なども考慮して，[kokoe]の[e]は，与格*=e* が o 終わりの名詞に続いて生じた二重母音 o-i が融合した結果生じたものだと考えておく。なお詳細な調査が必要であろう。

(124) チョット　デカケルデ　トジマリシトェーテエカ
cjoQto　dekake-ru=de　tozimari+si-toi-te=eka
ちょっと　出かける-NPST=CSL　戸締まり+ する-SEQ.おく-SEQ=SFP
「ちょっと出かけるから戸締まりしておいてね」

(125) コノ　ヘンワ　トッテモ　シズカヤネー
kono　heN=wa　toQtemo　sizuka=ja=neR
この　辺=TOP　とても　静か=COP=SFP
「この辺はとっても静かだね」

(126) ソレ　ワタシヤヨ
sore　watasi=ja=jo
それ　1=COP=SFP
「(写真に写っている人をさして）それは私だよ」

(127) ワシャー　クルマ　ニダェー　モットルワイ
wasjaR　kuruma　ni-dai　mot-tor-u=wai
1.TOP　車　二-台　持つ-PF-NPST=SFP
「私は車を二台持っている。」

(128) アノ　カシワ　オレターガ　タベルノデ　オマエニワ　ヤランゾ
ano　kasi=wa　ore-taR=ga　tabe-ru=node　omae=ni=wa　jar-aN=zo
あの　菓子=TOP　1-PL=NOM　食べる-NPST=CSL　2=LOC=TOP　やる-NEG.NPST=SFP
「あの菓子は俺たちが食べるから，お前にはやらないぞ。」

(129) タローガ　ワカカッタラ　エーギャー
taroR=ga　waka-kaQ=tara　jo-i=gjaR
太郎=NOM　若い-VLZ=CND　良い-NPST=SFP
「太郎が若かったらいいのになあ」

(130) アメヤガナ
ame=ja=gana
雨=COP=SFP
「雨じゃないか」

(131) ソレ　アンタヤガネ
sore　aNta=ja=gane
それ　2=COP=SFP
「それはあなたじゃないか」

(132) アシタワ　　ヤスミヤワナモ
asita=wa　　jasumi=ja=wa=namo
明日=TOP　　休み=COP=SFP=SFP
「明日は休み（です）よ」

(133) アシタ　アメヤガェー
asita　　ame=ja=gai
明日　　雨=COP=SFP
「明日は雨ですよ」

(134) アレ　タベタェーナー
are　　tabe-ta-i=naR
あれ　食べる-DES-NPST=SFP
「あれを食べたいな」

(135) アソコカラ　　オチタンヤワ。
asoko=kara　　oci-ta=N=ja=wa
あそこ=ABL　　落ちる-PST=NLZ=COP=SFP
「あそこから落ちたんだわ」

命題に対する話し手の認識を表すモダリティ要素は以下の通りである。まず，伝聞を表す*=gena*，*=to*，*=(Q)te*がある。*=gena*は準体助詞が不要だが，それ以外は必要である。希望を表す*-(i)ta-*は形容詞と同じ活用をする。その他，推量形*=jaro(o)*，証拠性を表す*=rasiR*，*=mitai* [mitæ:]，*=joR*，蓋然性を表す*=hazu*，*=ni cigai na-*，*kimaQ-tor-u*，*=ka=mo sire-N*，当為を表す*-ana kaN*，*-ana*，様態を表す*-(i)soR*，説明を表す*=N* {*=da* / *=ja*}がある。これらの認識系モダリティ形式についても十分に記述する用意がないため，それぞれの機能差や相互承接及び終助詞との共起関係は今後の課題とし，要素の列挙にとどめる。

(136) a. イエヤスワ　{アタマン / アタマガ}　　ヨカッタゲナ
iejasu=wa　　{atama=N / atama=ga}　　jo-kaQ-ta=gena
家康=TOP　　{頭=NOM / 頭=NOM}　　良い-VLZ-PST=HS
「家康は頭が良かったそうだ」

b. タロー　　アシタ　{タェーインスルンヤ(ッ)テ　　/ タェーインスルンヤト}
taroR　　asita　　{tai.iN+su-ru=N=ja=(Q)te　　/ tai.iN+su-ru=N=ja=to}
太郎　　明日　　{退院+する-NPST=NLZ=COP=QT / 退院+する-NPST=NLZ=COP=QT}
「（噂を聞いて）太郎は明日退院するんだって」

(137)　コンナ　イエニ　スミタェー
koNna　ie=ni　sum-ita-i
こんな　家=LOC　住む-DES-NPST
「こんな家に住みたい」

(138)　マンダ　ガクセーヤロー
maNda　gakuseR=ja-roR
まだ　学生=COP-LCTN
「（太郎は）まだ学生だろう」

(139)　ドーヤラ　ユンベワ　アメガ
doRjara　juNbe=wa　ame=ga
どうやら　夕べ=TOP　雨=NOM
{フッタミタェーヤ　/ フッタラシー　/ フッタヨーヤ}
{huQ-ta=mitai=ja　/ huQ-ta=rasi-i　/ huQ-ta=joR=ja}
{降る-PST=LCTN=COP　/ 降る-PST=LCTN-NPST / 降る-PST=LCTN=COP}
「どうやら夕べは雨が降ったみたいだ/らしい/ようだ」

(140)　ニゲタ　ドロボーワ　コノ　ヘンノ　ドッカニ　オルハズ
nige-ta　doroboR=wa　kono　heN=no　doQka=ni　or-u=hazu
逃げる-PST 泥棒=TOP　この　辺=GEN　どこか=LOC　いる-NPST=LCTN
「逃げた泥棒はこの辺のどこかにいるはずだ」

(141)　アェーツガ　ハンニンカモ　シレン
aicu=ga　haNniN=ka=mo　sire-N
あいつ=NOM　犯人=Q=ADT　知れる-NEG.NPST
「あいつが犯人かもしれない」

(142)　アリバェーガ　ナェーデ　ゼッタェー　アェーツガ　ハンニンニ
aribai=ga　nai=de　zeQtai　aicu=ga　haNniN=ni
アリバイ=NOM　無い-NPST=CSL　絶対　あいつ=NOM　犯人=LOC
{チガェーナェー / キマットル}
{cigai#na-i　/ kimaQ-tor-u}
{違い#無い-NPST / 決まる-PF-NPST}
「アリバイが無いから絶対あいつが犯人に決まっている」

(143)　ハヨー　{デンワセナー　/ デンワセナ　カン}
haja-u　{deNwa+se-naR　/ deNwa+se-na　kaN}
早い-INF　{電話+する-NEG.CND　/ 電話+する-NEG.CND　駄目}
「（独り言/相手に伝える場合ともに）早く電話しなければならない」

(144) マー　チョコットデ　アメン　フリソーヤ。
maR　cjokoQto=de　ame=N　hur-isoR=ja.
もう　少し=INST　雨=NOM　降る-SEEM=COP
「もう少しで雨が降りそうだ」

(145) オクレテ　スンマセン　ジュータェーシトッタンダワ
okure-te　suNmaseN　zjuRtai+si-toQ-ta=N=da=wa
遅れる-SEQ　すみません　渋滞+する-PF-PST=NLZ=COP=SFP
「遅れてすみません，渋滞していたんです」

９．１０　アスペクト

９．１０．１　接辞によるアスペクト標示

アスペクトを担う有標の接辞として*-joRr-*と*-tor-*が存在する。両者の対立は動作動詞では中和し，動作が継続していることを表すが（146），変化動詞に接続する場合，*-joRr-*がimperfective（不完成相，147），*-tor-*がperfect（パーフェクト相，148）として対立がある。直前の動詞の語彙的アスペクトによって，両者の意味は変わるが，このように記述しておく。

(146) コドモガ　{アルィートル / アルキョール}
kodomo=ga　{arui-tor-u　/ aruk-joRr-u}
子供=NOM　{歩く-PF=NPST / 歩く-IPFV-NPST}
「子供が歩いている」

(147) キガ　タオレヨール
ki=ga　taore-joRr-u
木=NOM　倒れる-IPFV-NPST
「木が倒れていく」

(148) {キガ / キン}　タオレトル
{ki=ga / ki=N}　taore-tor-u
{木=NOM / 木=NOM}　倒れる-PF-NPST
「木が倒れている」

*-joRr-*及び*-tor-*は存在動詞に接続することはできないが，*-joRr-*のみ形容詞に接続して過去の一時的状態を表すことができる（149）。ただし，「昨日」のような近い過去を表すことはできず，遠い過去である必要がある（149b）。

(149) a. ムカシノ　　コドモワ　　ツヨカリオッタ
mukasi=no　kodomo=wa　cujo-kar-ioQ-ta
昔=GEN　　子供=TOP　　強い-VLZ-IPFV-PST
「昔の子供は強かった（今はそうではない）」
b. ??キノーノ　　ユーヒワ　アカカリオッタ。
??kinoR=no　　juRhi=wa　aka-kar-ioQ-ta.
昨日=GEN　　夕日=TOP　赤い-VLZ-IPFV-PST
「??昨日の夕日は赤かった（今日はそうではない）」

９．１０．２　アスペクト語幹とアスペクト補助動詞

上記の他，アスペクト語幹として+*kaker-*「〜かける」，+*kakar-*「〜かかる」，+*owar-*「〜終わる」，+*hazimer-*「〜始める」，+*cuzuker-*「〜続ける」などがある。+*oer-*（標準語の「〜終える」に対応する）は使用しない。

(150) キガ　　タオレカケトル
ki=ga　　taore+kake-tor-u
木=NOM　倒れる+かける-PF-NPST
「木が倒れかけている」
(151) ノリカカッタケド　　ドアガ　　シマッテマッタ
nor-i+kakaQ-ta=kedo　　doa=ga　　simaQ-temaQ-ta
乗る-INF+かかる-PST=CNC　ドア=NOM　閉まる-SEQ.しまう-PST
「（電車に）乗りかけたがドアが閉まってしまった」
(152) タベオワットルヨ
tabe+owaQ-tor-u=jo
食べる+終わる-PF-NPST=SFP
「（すでに）食べ終わっているよ」
(153) ヨーヨト　　{ベンキョーシハジメタワ　/ ベンキョーシカケタワ}
joRjoto　　{beNkjoR+si+hazime-ta=wa　/ beNkjoR+si+kake-ta=wa}
ようやく　　{勉強+する+始める-PST=SFP　/ 勉強+する+かける-PST=SFP}
「ようやく（子供が）勉強し始めたわ」
(154) ズーット　　ハシリツヅケトッタラ　　マメガ　　デキタ
zuRQto　　hasir-i+cuzuke-toQ=tara　　mame=NOM　deki-ta
ずっと　　走る-INF+続ける-PF=CND　肉刺=NOM　出来る-PST
「ずっと走り続けていたら肉刺が出来た」

アスペクト補助動詞として, 次のものがある; 意図的な動作結果を表す*-tar-* ~ *-dar-*(//-te#ar-//)。*-tar-*は動作の対象を主格にとり，動作主を背景化するものである。標準語の「〜テアル」は，不利益を表しにくいが, それに形式的に対応する本方言の*-tar-*にはそうした制限はない（155b)。その他に，意図的な動作を表す*-tek-* ~ *-dek-*(//-te#ok//)，非意図的な動作かつ不可逆性を表す*-tema(w)-* ~ *-dema(w)-*，動作の進展を表す*-te#k-* ~ *-tek-*(//-te#ku-ru//)，*-te#ik-*などがある。これらについての詳細な調査は今後の課題として，現時点では例を挙げるに留める（8.1.1節も参照)。

(155) a. カレーガ　　ツクッタル
kareR=ga　　cukuQ-tar-u
カレー=NOM　作る-SEQ.ある-NPST
「カレーが作ってある」
b. カギガ　　コワェータル
kagi=ga　　kowa-i-tar-u
鍵=NOM　　壊す-INF-SEQ.ある-NPST
「鍵が壊してある（＝壊されている)」

(156) ホンナラ　　イッテクワ
hoN=nara　　iQ-tek-u=wa
そう=COP.CND　　言う-SEQ.おく-NPST=SFP
「(休むと伝えて欲しいと頼まれて）それなら言っておくよ。」

(157) ウッカリ　コドモノ　　オモチャ(オ)　　コワェーテマッタ
uQkari　　kodomo=no　　omocja(=o)　　kowai-temaQ-ta
うっかり　子供=GEN　　おもちゃ(=ACC)　壊す-SEQ.しまう-PST
「うっかり子供のおもちゃを壊してしまった」

(158) アメガ　　フッテキトル
ame=ga　　huQ-te#ki-tor-u
雨=NOM　　降る-SEQ#くる-PF-NPST
「雨が降ってきている」

(159) ドンドン　ヒトガ　　シンデイキョール
doNdoN　　hito=ga　　siN-de#ik-joRr-u
どんどん　人=NOM　　死ぬ-SEQ#いく-IPFV-NPST
「(病気や戦争などで）どんどん人が死んでいっている」

アスペクト接辞*-joRr-*，*-tor-*は，アスペクト語幹・補助動詞と比較すると文法化しているといえる。その理由の一つとして，(154)，(158)，(159)のようにアスペクト語幹・補助動詞に*-joRr-*，*-tor-*が付接可能であり，これらの接辞の方がより包括的なものであるためである。また，アスペクト語幹・補助動詞は意味的な制約から*-joRr-*，*-tor-*に比べて付接できる動詞が限られる点も

理由の一つとして挙げられよう（160）。

(160) a. *キガ　　タオレオワッタ
*ki=ga　　taore+owaQ-ta
*木=NOM　倒れる+終わる-PST
「*木が倒れ終わった」
b. *カゼガ　フイテアル
*kaze=ga　hui-te#ar-u
*風=NOM　吹く-SEQ#ある-NPST
「*風が吹いてある」

ただし，形態上アスペクト接辞*-tor-*が完全に文法化しているとは断定しづらい。*-tor-*は対比の*=wa*を挿入し，*-te=wa or-*という形を作ることができるためである（161）。他方，*-joRr-*は，動詞語幹と当該接辞との間に*=wa*の挿入を許さない。同じアスペクト接辞でも文法化の度合いが異なっていることが伺える。また，*-joRr-*，*-tor-*もアスペクト語幹・補助動詞と同じく状態動詞には接続できない，*-tor-*とアスペクト語幹・補助動詞は形容詞にも接続できないという共通の制限がある。したがって，アスペクト接辞とアスペクト語幹・補助動詞の文法化の度合いは，相対的な違いにとどまると言える。

(161) ツクッテワ　　オルケド
cukuQ-te=wa　　or-u=kedo
作る-SEQ=CNTR　いる-NPST=CNC
「（料理を）作ってはいるけど」

９．１１　その他

動詞の活用語尾としてのエビデンシャリティーを表す要素は存在しないが，命題の外側に位置する間接的エビデンシャリティー要素が存在する（9.9節）。

談話に関する表現については今回談話調査を実施していないため，分からない点が多い。しかしながら，調査の中で談話管理に関する表現が得られたので，ここに記述しておく。本方言では動詞の接辞などによるスイッチリファレンス専用の接辞や接語は存在しない。一つの文で主語の交替が起こる場合は，それぞれの節における主語が必ず明示される。

(162) キンノー　ワシワ　　オオサカェー　イッテ
　　kiNnoR　wasi=wa　oRsaka=i　　iQ-te
　　昨日　　1=TOP　大阪=DAT　　行く-SEQ
　アェーツワ　　キョートェー　イッタ
　aicu=wa　　kjoRto=i　　iQ-ta
　あいつ=TOP　京都=DAT　　行く-PST
　「昨日私は大阪に行ってあいつは京都に行った」

確認要求的表現のうち，命題確認要求はコピュラ推量形の*=ja-ro(R)*あるいは上昇イントネーション（↑）を伴った*=ja#nai=ka* [janæ:ka]を用いる（163）。知識確認要求は*=ja-ro(R)*あるいは*=gaja*，下降イントネーション（↓）を伴った=ja#nai=ka [janæ:ka]を用いる（164）。

(163) a. オマェーサンノ　オトッツァンワ　マェーバン　サケ　ノンドルヤロ
　　omai-saN=no　otoQcaN=wa　maibaN　sake　noN-dor-u=ja-ro
　　2-HON=GEN　お父さん=TOP　毎晩　　酒　　飲む-PF-NPST=COP-LCTN
　　「お前のお父さんは毎晩お酒を飲んでいるだろう」
　b. シラナンダヤナェーカ
　　sir-anaNda=ja#na-i=ka↑
　　知る-NEG.PST=COP#無い-NPST=Q
　　「（もしかして太郎は）知らなかったんじゃないか？」
(164) a. アソコニ　　ユービンキョク　アルヤロ.　　ソコオ　　マガリャー･･･
　　asoko=ni　juRbiNkjoku　ar-u=ja-ro.　soko=o　magar-jaR
　　あそこ=LOC　郵便局　　ある-NPST=COP-LCTN　そこ=ACC　曲がる-CND
　　「あそこに郵便局があるだろう？そこを曲がると･･･」
　b. ホレ　ミヨ　　{シラナンダガヤ　/　シラナンダヤナェーカ↓}
　　hore　mi-jo　　{sir-anaNda=gaja　/　sir-anaNda=ja#na-i=ka}
　　ほら　見る-IMP　{知る-NEG.PST=SFP　/　知る-NEG.PST=COP#無い-NPST=Q}
　　「ほらみろ，（やっぱり太郎は）知らなかったじゃないか」

９．１２　待遇
９．１２．１　尊敬

ここで言う「尊敬」とは「主語に対する上位待遇」を意味する。尊敬接辞としては，*-jaR(s)-*，*-(j)asse-*が認められるが，両者の敬意の差などについての詳しい調査には至っていない。

(165) キョーノ　シンブン　{ヨミャータカ　/ ヨマッセタカ}
kjoR=no　siNbuN　{jom-jaR-ta=ka　/ jom-asse-ta=ka}
今日=GEN　新聞　{読む-HON-PST=Q　/ 読む-HON-PAST=Q}
「今日の新聞を読まれましたか」

９．１２．２　丁寧

聞き手に対する待遇を表す「丁寧」の形式としては，*-(i)mas-*がある。この接辞の屈折等については未調査である。

(166) ワシワ　アシタワ　ウチニ　オリマスデ
wasi=wa　asita=wa　uci=ni　or-imas-u=de
1=TOP　明日=TOP　家=LOC　居る-POL-NPST=CSL
「私は明日は家にいますから」

この他，終助詞=*namo*は，相手への伝達に際して「丁寧」な態度を表すものとされる（9.9節）。また，名詞述語文（コピュラ文）では，=*ja(R)*よりも=*ja-i*とした方が丁寧であるというが，詳細については今後の調査課題である。

９．１３　情報構造

９．１３．１　主題化

主題化される要素は，無助詞で文頭に置かれることが多いが，必ずしも文頭でなくても良い。あるいは，提題助詞=*wa* を伴う場合もある。目的語が無助詞であることとの関連については 9.2 節で既に述べた。

(167) アノ　サラ（ワ）　タローン　ワッタンヤワ
ano　sara(=wa)　taroR=N　waQ-ta=N=ja=wa
あの　皿(=TOP)　太郎=NOM　割る-PST=NLZ=COP=SFP
「あの皿は，太郎が割ったのだよ」

９．１３．２　焦点化などについて

焦点化に関する詳細な調査はできていないが，主語が焦点化される場合には（=*N* ではなく）=*ga* が現れやすく，目的語が焦点化される場合には=*o* が現れやすいようではある（例は略）。

また，以下に示すように=*koso*，=*kosari* という形式も見られる。対比的な取り立てを表すものと考えられるが，詳細は今後の課題である。

(168) オマェーサンヤデコソ　カネ　カシタンダガネ
omaisaN=ja=de=koso　kane　kasi-ta=N=da=ga=ne
2=COP=CSL=FOC　金　貸す-PST=NLZ=COP=SFP=SFP
「あなただから，お金を貸したのだ（他の人であれば貸さない，ということを含意）」

(169) オヤヤデコサリ　シンパェースルンダワ
oja=ja=de=kosari　siNpai+sur-u=N=da=wa
親=COP=CSL=FOC　心配+する-NPST=NLZ=COP=SFP
「親だからこそ（お前を）心配するのだ」

その他，イントネーションと情報構造の関係などについては未調査である。

１０　複文

１０．１　副詞節

テンス標示のない副詞節を導く副動詞については，4.1.2 節で既に述べた。ここでは，その一覧を再掲し，例を挙げる。

表 11：副動詞の屈折

		子音語幹動詞	母音語幹動詞	来る	する
中止	肯定	*-te ~ -de*	*-te*	*ki-te*	*si-te*
	否定 1	*-asuto*	*-suto*	*ko-suto*	*se-suto*
	否定 2	*-azuni*	*-zuni*	*ko-zuni*	*se-zuni*
条件 1	肯定	*-ja*	*-ja*	*ko-ja*	*si-ja ~ se-ja*
	否定	*-ana*	*-na*	*ko-na*	*si-na* *se-na*
条件 2	肯定	*-tara ~ dara*	*-tara*	*ki-tara*	*si-tara*
	否定	*-anaNdara*	*-naNdara*	*ko-naNdara*	*si-naNdara*
同時		*-inagra*	*-nagara*	*ki-nagara*	*si-nagara*

(170)　ワシワ　　キンノー　ジュージニ　イエー　カェーッテ
　　wasi=wa　kiNnoR　zjuR-zi=ni　ie-i　kaiQ-te
　　1=TOP　昨日　10-時=LOC　家=DAT　帰る-SEQ
　チョコット　テレビ　ミテ　　ネタ
　cjokoQto　terebi　mi-te　ne-ta
　少し　　テレビ　見る-SEQ　寝る-PST
　「私は昨日，10 時に家に帰って，少しテレビを見て，寝た」

(171)　キンノーワ　ウチー　カェーッテ　フロェー　{ハェーラズニ / ハェーラスト}　ネタ
　　kiNnoR=wa　uci-i　kaiQ-te　huro-i　{hair-azuni　/ hair-asuto}　ne-ta
　　昨日=TOP　家-DAT　帰る-SEQ　風呂-DAT　{入る-SEQ.NEG　/ 入る-SEQ.NEG}　寝る-PST
　「昨日は家に帰って，風呂に入らないで，寝た」

(172)　イチニ　イチ　タシャ　ニン　ナル
　　ici=ni　ici　tas-ja　ni=N　nar-u
　　一=LOC　一　足す-CND　二=LOC　なる-NPST
　「一に一を足せば二になる」

(173)　オキナ　　ホカットケ
　　oki-na　　hokaQ-tok-e
　　起きる-CND.NEG　捨てる-SEQ.おく-IMP
　「起きなければ，放っておけ」

(174)　アシタ　アメン　フッタラ　コマル
　　asita　ame=N　huQ-tara　komar-u
　　明日　雨=NOM　降る-CND　困る-NPST
　「明日雨が降ったら，困る」

(175) アシタ　アメン　　フラナンダラ　エーニナー
asita　ame=N　hur-anaNdara　jo-i=ni=naR
明日　雨=NOM　降る-CND.NEG　良い-NPST=CNC=SFP
「明日雨が降らなければ，良いのに」

(176) アェーツワ　イッツモ　シンブン　ヨミナガラ　ゴハン　クー
aicu=wa　iQcumo　siNbuN　jom-inagara　gohaN　ku-u
あいつ=TOP　いつも　新聞　読む-SIM　ご飯　食べる-NPST
「あいつはいつも新聞を読みながらご飯を食べる」

テンス標示される副詞節を導く接続助詞については，8.1.3 節で既に述べたように，*=de*（原因・理由），*=ni*（逆接 1），*=kedo*（逆接 2），*=ga*（逆接 3）がある。ここでは，その例をいくつか挙げる。

(177) ジカン　ナェーデ　　ハヨ　　イコマェー
zikaN　na-i=de　haja-u　ik-o=mai
時間　無い-NPST=CSL　早い-INF　行く-INT=SFP
「時間がないから，早く行こう」

(178) キンノー　アタマン　イタカッタデ　　イツモヨリ　ハヨ　　ネタ
kiNnoR　atama=N　ita-kaQ-ta=de　icumo=jori　haja-u　ne-ta
昨日　頭=NOM　痛い-VLZ-PST-CSL　いつも=CMP　早い-INF　寝る-PST
「昨日は，頭が痛かったので，いつもより早く寝た」

(179) ジカン　ナェーニ　　モタモタシトル
zikaN　na-i=ni　motamota+si-tor-u
時間　無い-NPST=CNC　もたもた+する-PF-NPST
「時間がないのに，もたもたしている」

(180) コノ　リンゴワ　　タカカッタニ　　チョットモ　アマナェー
kono　riNgo=wa　taka-kaQ-ta=ni　cjoQto=mo　ama#na-i
この　林檎=TOP　高い-VLZ-PST=CNC　少し=ADT　甘い#NEG-NPST
「この林檎は高かったのに，少しも甘くない」

この他に，動詞・形容詞の終止形にコピュラの条件形*=nara* が続く形で仮定条件を表したり，動詞・形容詞の非過去終止形に*=to* の続く形が条件表現として用いられる場合もある。

(181) イエー　クルナラ　　デンワシテカラ　　イリャー
ie-i　ku-ru=nara　deNwa+si-tekara　ir-jaR
家-DAT　来る-NPST=COP.CND　電話+する-CNJ　来る-HON.IMP
「家に来るなら，電話をしてから来てください」

(182) マド　アケルト　　ツメタェー　カゼン　　ハェーッテ　キタ
mado　aker-u=to　　cumeta-i　kaze=N　　haiQ-te#ki-ta
窓　　開ける-NPST=CND　冷たい-NPST　風=NOM　　入る-SEQ#来る-PST
「窓を開けると冷たい風が入ってきた」

また，以下は+*joR=ni*「〜する様に」の例である。

(183) ソトン　　ヨー　ミエルヨーニ　　マド　アケタ
soto=N　　joR　mi-e-ru=joRni　　mado　ake-ta
外=NOM　　よく　見る-POT-NPST=PUR　窓　　開ける-PST
「外がよく見えるように窓を開けた」

１０．２　連体修飾節

連体修飾節中でも，動詞・活用型形容詞はテンス標示をし，文終止の場合と同じ形式をとる。ただし，非活用型形容詞の非過去テンスの場合には連体形（=*na*）を，コピュラ動詞の非過去テンスの場合は，属格助詞=*no* をとる。ムード接辞を連体修飾節中に取ることができるか否かについては，未調査である。

(184) オマエハン　ヨー　ミル　　シバェーワ　　ナンヤナモ
omae-haN　joR　mi-ru　　sibai=wa　　naN=ja=namo?
2-HON　　よく　見る-PST　芝居=TOP　　何=COP=SFP
「あなたが，よく見る芝居は何ですか」

(185) キンノー　ミトッタ　　テレビニ　　タローガ　　デテリャータ
kiNnoR　mi-toQ-ta　　terebi=ni　　taroR=ga　　de-ter-jaR-ta.
昨日　　見る-PF-PST　テレビ=LOC　太郎=NOM　　出る-PF-HON-PST
「昨日見ていたテレビに太郎が出ていた」

(186) アシガ　ハヤェー　ヒトガ　　ウラヤマシー
asi=ga　haja-i　　hito=ga　　urajamasi-i
足=NOM　速い-NPST　人=NOM　　羨ましい-NPST
「足が速い人が羨ましい」

(187) アシガ　ハヤカッタ　　トモダチワ　　ニンキモノダッタ
asi=ga　haja-kaQ-ta　　tomodaci=wa　　niNki+mono=daQ-ta.
足=NOM　早い-VLZ-PST　友達=TOP　　人気+者=COP=PST
「足が速かった友達は人気者だった」

１０．３　引用節

引用節をとる動詞には，*i-*「言う」，*kik-*「聞く」*omo(w)-*「思う」などがある。網羅的な調査には至っていない。また，引用節は，助詞=*to*「って」によって導かれる。

(188) イシャニ　ナッタ　ヒトガ　オルト　キートッタガ　ダレガ　イシャヤノ
isja=ni　naQ-ta　hito=ga　or-u=to　kiR-toQ-ta=ga　dare=ga　isja=ja=no
医者=LOC　なる-PST　人=NOM　いる-PST=QT　聞く-PF-PST=CNC　誰=NOM　医者=COP=SFP
「医者になった人がいると聞いていたけど，誰が医者なの？」

１０．４　言いさし

多くの副詞節は，それだけで文を終止することができる。体系的・網羅的な調査には至っていないが，以下のような例が見つかっている。

(189) コレモ　クッタラ
kore=mo　kuQ-tara
これ=ADT　食べる-CND
「これも食べたら？」（勧め）

(190) ワシワ　アシタワ　マツリニ　イクデ
wasi=wa　asita=wa　macuri=ni　ik-u=de
1=TOP　明日=TOP　祭り=LOC　行く-NPST=CSL
「私は明日，祭りに行くからね」

なお，命令形*-jaR*と条件形*-jaR*は，分節音上は同形であるが，今のところは別のものとして分析をしておく。ただし，そのようにする積極的な理由があるわけでもなく，(189)のように条件形*-tara*が行為を勧める形式に使えることなどからして，両者に何らかの関係がある可能性は十分にある。一宮市出身の筆者の直感としては，以下の文は「やりたければ，やれば」程度の意味でも解釈可能である。なお，9.9節の注16も参照のこと。

(191) ヤリタイナラ　ヤリャー
jar-ita-i=nara　jar-jaR
やる-DES-NPST=COP.CND　やる-IMP
「やりたいなら，やりなさい」

略号リスト

-	接辞境界
=	接語境界
.	音節境界
#	統語的語境界
1	一人称
2	二人称
ABL	ablative（奪格）
ACC	accusative（対格）
ADT	additive（累加）
ASC	associative（共格）
BEN	benefactive（受益）
CAUS	causative（使役）
CMP	comparative（比格）
CNC	concessive（逆接）
CND	conditional（条件）
CNJ	conjunctural（接続）
CNTR	contrastive（対比）
COP	copula（コピュラ・繋辞）
CSL	causal（理由）
DAT	dative（与格）
DES	desiderative（願望）
EXM	exemplification（例示）
FOC	focus（焦点）
GEN	genitive（属格）
HON	honorific（尊敬）
HS	hearsay（伝聞）
IMP	imperative（命令）
IPFV	imperfective（不完成相）
INF	infinitive（非定形）
INST	instrumental（具格）
INT	intentional（意志）
LCTN	low certainty（推測）
LMT	limitative（限界格）
LOC	locative（所格）
NEG	negative（否定）
NLZ	nominalizer（名詞化）
NOM	nominative（主格）
NPST	non past（非過去）
PASS	passive（受動）
PF	perfect（パーフェクト）
PL	plural（複数）
POL	politeness（待遇）
POT	potential（可能）
PST	past（過去）
PUR	purposive（目的）
Q	question（疑問）
QT	quotative（引用）
RFL	reflexive（再帰）
RPT	repetition（反復）
SEEM	seeming（様態）
SEQ	sequential（中止形）
SFP	sentence final particle（終助詞）
SIM	simultaneous（同時）
TOP	topic（提題）
VLZ	verbalizer（動詞化）

参考文献一覧

愛知県教育委員会 (1985) 『愛知のことば：愛知県方言緊急調査報告』

占部由子 (2018)「南琉球八重山語西表島船浮方言の文法概説」修士論文，九州大学.

上野善道 (1977) 「日本語のアクセント」『岩波講座日本語5音韻』281-321. 東京：岩波書店.

金田一春彦 (1974)『国語アクセントの史的研究－原理と方法』東京：塙書房.

金田一春彦 (1978)「愛知県アクセントの系譜」『国語学論集』1: 1-19. 東京：笠間書院.

窪薗晴夫（監修），森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦（編）(2015) 『甑島里方言記述文法書』大学共同利用機関法人人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」サブプロジェクト「鹿児島県甑島の限界集落における絶滅危機方言のアクセント調査研究」研究成果報告書. 東京：国立国語研究所.

小西いずみ (2016) 『富山県方言の文法』ひつじ書房.

下地理則 (2018) 『シリーズ記述文法1 南琉球宮古語伊良部島方言』東京：くろしお出版.

新修稲沢市史編纂会（編） (1982) 「第2章 稲沢市方言の構造」『新修稲沢市史研究編６　社会生活下』[『日本列島方言叢書10 中部方言考③（岐阜県・愛知県)』pp. 433-366に再録]

東條操 (1927) 『国語の方言区画』東京：育英書院.

東条操 (1954) 『日本方言学』東京：吉川弘文館.

日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法4　第8部モダリティ』東京：くろしお出版.

平子達也 (2017) 「愛知県新城市方言の名詞アクセント資料」『駒澤大学文学部研究紀要』75: 1-28.